



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニーチェとオーヴェルベックとの往復書簡（二）：1880年から1883年まで
Author(s)	古内, 武
Citation	北海道大学人文科学論集, 10, 185-289
Issue Date	1973-12-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34304
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P183-289.pdf



ニーチエとオーヴェルベックとの往復書簡(二)

——一八八〇年から一八八三年まで——

古 内 武

九九、オーヴェルベックより

バーゼル、一八八〇年一月二五日

親友よ、ほんの短い一言だ、君がもうナウムブルクを去っていてこの便りを自分で読まなければならないかも知れないからね。つまり君に思い出して貰わねばならないことがあるのだ、僕が君のためにスイス公債に投資した一〇〇〇フランが今月三一日で抽籤のために残念ながらもまた現金になって戻ってくるのだ。君自身この金をどうするか決めているかい、それとも僕が投資を続ける方がいいかね？君の意向を出来るだけ早く報せてくれ給え。同時に君の今の状態をちょっと報せてくれると本当に有難い、この前の報せはまた僕たちを非常に苦しい緊張の中に移し入れているのだからね。月曜に僕たちはここで盛大なデ・ウェッテ祭を催した、その時に君の以前の生徒の大学生ザルトーリウスが君のことを尋ね、そして君に自分を思い出させて欲しい、自分が感謝して追憶していることを君に確信させて欲しいと実に熱心に僕に頼んだ。フラウの眼の調子は大いに良い。僕と共に彼女は、君がまた少しく喜ばしい報せを僕たちにくれることが出来ればいいと心から願っている。友よ、君は今どこにいるのだろうか？

君の

オーヴェルベック

一〇〇、オーヴェルベックより

〔葉書、消印は八〇年一月二七日〕

親友よ、クルルからの報せ⁽¹⁾で僕たちは、数週来君に関して抱いていた心配を目下のところは追い払った。しかし例の一〇〇〇フランに関しては僕は依然どうしてよいかわからない。僕は君を損害から守るために土曜日まで、君がその金を使うのかそれとも僕がこの世話をし続ける方がよいのかを知らねばならない。だから折返しこれについて一言指示してくれると有難い。

君の

〇

(1) ニーチェの妹からの報せ。ところで「母と妹へのニーチェ書簡集」(一九〇九年版)における七九年十二月と八〇年一月の妹宛ニーチェ書簡は四通あるが、何れもニーチェの惨状を示している。ただしオーヴェルベック宛一〇一番における「去年は……一一八日あった」という文と全く同じ文を含んでいる手紙(一二月二九日付)は一九二六年版では削除されており、一二月三一日付と一月一六日付との手紙は何れも原本欠のものである。

一〇一、ニーチェより

〔ナウムブルク、八〇年一月末か二月初め〕

調子が悪かった、僕はこの二、三行すら書けなかったし、旅立つことも出来なかった。

どうか金を君の判断で投資してくれ給え、早速に。同封のデトロフ⁽¹⁾の勘定も払ってくれるかね! (これは僕には大いに疑問がある——が僕はどう仕様もない。)

レー博士は五日の予定で僕たちのところに行った、健康状態は割に落着いていた時で、僕にとって非常な心の慰めになった。⁽²⁾

君と奥さんとを心から思いつつ

君の友

おお、この冬ノ（去年は僕はひどい発作の日が一一八日あった。）

(1) バーゼルの書店。

(2) ニーチェの母がニーチェの意向によつてレーに手紙を出し、それに応じてレーは直ちにナウムブルクを訪れて一月一四日から二〇日頃まで滞在した。

一〇二、ニーチェより

〔葉書、消印はアーラ、⁽¹⁾八〇年三月一三日〕

貴重な親友よ、明日僕たちはヴェネツィアへ出発する。⁽²⁾僕は全く不満だ、僕の状態はこの三週間に後退し、苦痛は絶えず非常に激しい。それで今や、大いに考えられてきたヴェネツィア実験だが、僕はここに対する不信が消えたわけではない。君と奥さんに心から感謝しつつ。

(1) リーヴァの東方、ヴェネツィアへの途中の町。

(2) ニーチェとガストである。ニーチェは二月一三日にリーヴァに到着し、一六日にガストへ手紙を出した。ガストは二三日にリーヴァへ出掛けた。この時期のニーチェとガストに関してはベルヌリ書第一卷三〇五頁以下を参照のこと。

一〇三、オーヴェルベックより

バーゼル、八〇年三月二七日

親友よ、君の今度の葉書は僕には驚きだった、ヴェネツィアはもう問題外なのだと思っていたからね。そこからの

最初の報せがリーヴァからの今度の報せとは違った調子のものである様にと願うのみだが、心配ではある。最近ブルクハルトがまた僕に君のことを尋ねた際、僕たちのところでは稀な好天であるこの春が上部イタリアでは非常に陰悪だということを耳にしたと彼は言っていた。僕にとって何よりも安心なことはケーゼリッツが君の近くにいて分っていることだ。僕がもう何ヶ月も前から、全くこんな扱いを受けるいわれない彼の手紙に対して、返事を出さずにいるのを実に心苦しく思っているということを、彼が君にこの手紙を読んで聞かせる時に直ぐ知ってくれと有難いし、或いは君から知らせさせて欲しい。僕は一月初めからは特にペンを離すことが殆んどなく、手首を疲れせながらベツトへ行くこともしばしばだったのだ。やっと今僕は、既に君に報せたと思う目的のために「聖書經典の歴史について」という題で出版させる二論文を仕上げた、つまり、清書の恐るべき作業もだ。それで君にも一ヶ月以上手紙を書かなかった、そして先ず今日は、君に送金すべきかどうかを尋ねるわけだ。国庫は年金を三ヶ月毎に払う。さらに僕は、ホイスラー資金の分が春と秋に支払われる様にハーゲンバッハと申し合わせてあった。それで僕が君に直ぐに送ることが出来るのは、四月一日に、七五〇フランであろうと思う。欲しいならそれを直ぐ報せてくれ給え、出来れば最も都合のよい送金方法も。大した損失なしにバーゼルの銀行紙幣をイタリアで換金できるのなら、君にそれを送るのが一番良からうと思う。或いは一部をナウムブルクの妹さん宛に送ろうか？彼女の手に僕は最近、ベスイガー家が借金を全部返してくれた後に、君のこの金庫の金を七フラン残してすっかり空にして一七〇フランを渡した、これは君のためにナウムブルクで投資される。

君にもケーゼリッツにも興味があろうと思われるニュースは、ブルクハルトのコンスタンティヌスの第二版が間もなく出ることだ。しかも今度は彼自身がこのことの配慮をしている。彼がそのことを僕に伝え、そして僕の領域で彼が参考にしたらいいと思われる文献を教えてくれと僕に求めた時、僕は自分がどんなに彼の書のお蔭を蒙っているかを彼に遂に述べる絶好の機会を得たのだ。僕たちは近頃何回もそのことで話し合った。——昨日ここでクリス

ト受難日コンサートがあつた、その時君が宣伝のために持ち出された。ここの或る新聞がこんなことを書いたのだ、最近或る哲学者——これ以上名前までは挙げられていなかった——《この挿入文は手紙の下部に注記されているもの》がバツハのなまのクリスト教ということを言ったが、⁽¹⁾教会を満たすであらうものは疑いもなくまさにそれであらう、と。明らかにこの寄稿者は、クリスト教が、かきか何かの様に、「なま」で食うのが一番うまい、或いは「なま」でしか食えないものだという信念を持っていたのであり、序でながらこの信念はここでは何れにせよ一般的だ。無論かきの場合に既にそのことは必ずしも正しくないものであり、それが通用している限りこの食物は多くの人の口に合ふぬものにされている。——

フラウが心からよろしくとのこと、そしてまだ彼女の翻訳が終っていないのを恥じている。しかし眼が二週間前にまたちょっと再発したのだ、そのため僕は彼女をツューリヒのホルナーのところへ行かせた、この人を僕たちは氏神様 Genus loci よりも信用しているのだ。相談の結果は非常に良いものであつて、特に心配せねばならぬ様なものは何も見出されなかった。それが長く続いているということだけが厄介であつて、フラウには色々の点で非常に辛いのだ。目下は僕たちはまた可成り良い時期に恵まれている、風が吹くのが何時ものことながらフラウにとって困るだけだ、これについては僕自身は彼女からあれこれ聞かされるだけだ。

では直ぐに報せをくれ給えよ、上に述べた事柄について、その他君に関する報せも。ケーゼリッツ氏に心からお願ひしたいのは、何か詳しく報せることがある場合には君の代りに報告作業をやってくれることだ。彼にフラウからも僕からも呉々もよろしくと伝えてくれ給え。この手紙がヴェネツィアの彼の元の住所宛てで君たちの手に入ることを期待する。

いつも君の

(1) 「漂泊者とその影」一四九節参照。同書は七九年一二月二〇日頃に友人たちに配られた。オーヴェルベックからニーチエへの礼状は、九八番の「君の数々の手紙」の中に含まれていた筈である。

一〇四、ニーチエより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八〇年三月二七日〕

親友よ、ヴェネツィアの工合がどうかはまだ分らない、僕が思ったよりは良いかも知れない。差し当り先ず、非常にひどい発作が一度あった。——今日僕は自分で見付けた宿へ移る。その宿は僕の要求通りに、狭い入江に囲まれた内部にあるのではなく、海岸の様に広々としていて、死者たちの島を見晴らしている。ヴェネツィアは最良の敷石と森の様な蔭とを持つている。同時に埃がない。天気は清朗。リードも良いことが分った。君と奥さんの好調を祈る！愛情をもって僕を考えてくれ給え！

君たちの F・N

依然ケーゼリツツのところが宛先だ。

(1) ガストの住居のあったサン・カンチアーノ新小路から北東に百米ほど歩くと岸辺に出る。そこから見ると北東海上に聖ミケーレの島が浮んでいる。この島は全島が墓地である。

一〇五、ニーチエより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八〇年四月二日〕

配慮深い親友よ、ケーゼリツツの豊富な経験に従って次の方法でお願いする。金を普通の書留便で(ケーゼリツツの

住所へ) 金のことは一切表記せずに五〇〇フランだけフランスの紙幣かスイスの紙幣で(バーゼルの紙幣ではなく)送ってくれ給え。残りの二五〇フランは職工銀行に預けてくれ給え。——何と君に面倒をかけることか!!——僕の部屋は二二フィートの高さで、僕は海風を直接に受けるのだ、僕はこの場所の鎮静作用を感じている。僕はまだ絵画見物はやっておらず、教会に飽きることを知らない。教会史には一層益々だ!だからこそこれが最近進捗していることに僕は心から祝意を表する。君と奥さんに心からの友情をもつて。

F・N

一〇六、オーヴェルベックより

バーゼル、八〇年四月七日

親友よ、お望みの五〇〇フランをフランス紙幣で同封する——いわゆるスイス銀行はバーゼルの銀行と同様に民間事業であり、その紙幣はイタリアでバーゼル紙幣以上の価値を持つ筈がない。スイス連邦自体の紙幣というのは無い。この送金がうまく着くといひ、着いたらどうか報せてくれ給え。——ヤーコプ・ブルクハルトが昨日も君によろしくと言っていた。四月一日にローデが突然僕たちを訪ねてきて日曜まで滞在した。彼のギリシヤ文学史が彼を本当に疲らせて、彼は全く休養を要する様に見えた。しかし彼の主な悩みは目下のところ、とに角テュービンゲンだ、妻子がいなければ彼はそこには我慢出来ないだろう。僕たちは彼を大いにいたわった、そして彼の来訪が僕たちには非常に嬉しかった。彼は近く君に自分で手紙を書くと言っていた。

一昨日、十八世紀の人々の最初の校正刷がきた。まだ遺憾な点が沢山残っていた、そして全体が容易ならぬ冒険だ。最初に置かれているフォントネルこそ、まさに楽な仕事ではなかったのだ。

ヴェネツィアの鎮静作用が持続しているといひがと思う、そこにその様な作用があるということは十分考えられ

る、そして暑熱がくるまでにまだ一ヶ月あることは確かだろう。心からの挨拶を君に送る、というこの文句を読みながらケーゼリッツ氏は自身に対してもそれが言われているのであることを直ちに読み取ってくれることだろう。君の

O

一〇七、ニーチエより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八〇年四月二日〕

有価物書状が幸いにして且つ実に安く（一〇サンチーム）僕の手に入った、本当に有難う！親友よ、僕たちは数週間続きの雨天とシロッコに見舞われていた。——僕の住居は二二フィートの高さにあつて、世界の果の様に静かだ。僕は、ドイツ語になりつつあるサント・ブーヴのことを考えると非常に嬉しい（彼の流儀の滑稽な改作ものを何か読みたいと思ったら、バルザックのクロディーヌの浮気 *les caprices de Claudine* を読み給え）。僕のスタンダール書がどこにあるか分るだろうか？書籍目録のことを報せてくれたことがあつたね。フェステルゼン書店に、以前僕に送ってくれた毎週発行の新刊書目録を申し込んでくれないか。けれど僕はそれを何時も三ヶ月毎に欲しい。従つて今年の最初の分を今欲しい（ケーゼリッツの住所へ）。ケーゼリッツがよろしくとのこと、彼は大いに忙しい、僕たちは夕方になつて顔を合わせる、彼はシュティフターを読んでもくれている。

君の F・N

一〇八、オーヴェルベックより

〔葉書、消印はバーゼル、八〇年四月二〇日〕

親友よ、スタンダール書についての君の質問にまだ答えていないのを今思い出した。一体君の妹さんは、僕たちが

預っていた二つの書籍入り木箱が今はナウムブルクにあることをまだ君に報せていないのだろうか、あの本も一緒に。フラウが当時作った書籍目録は残してあったのだが、最近矢張り君の妹さん宛てに送ってある。「文献週報」はもう受け取っていることと思う、僕がこの週報を取り消すまで僕のところ溜っていた古い号も。新年度の一三一—五号が今日届いたが、また三ヶ月分を一緒にする。

君の

O

一〇九、ニーチェより

[葉書、消印はヴェネツィア、八〇年四月二十八日]

最近挙げたバルザックの書の本当の表題はボヘミアの王子 *un prince de la Bohême* だ。サント・ブーヴについての非常に注目すべき記述をジョルジュ・サンドの我が生活の物語 *histoire de ma vie* 最終部(第五部 *cinquième partie*) 第六章に見出した。

書店のもの凡てが到着した。この上ない感謝だ。

絶えずシロッコ *Scirocco sempre*

ツェーリヒの社会主義の書店が出している書籍目録が欲しいのだが。その書店の正確な宛名が分らないだろうか？
君と奥さんの元気を祈りつつ

F・N

一一〇、オーヴェルベックより

バーゼル、八〇年五月二八日

親友よ、フラウの返事に、ズイーベンリスト氏の手紙を同封して貰う、その説明を一言だけ付け加える。一昨日僕は、君のここの宛先へ宛てられた一つの密封された小包を受け取った、そしてその表記によって本であることが分つたので、税関での面倒なしに楽に発送するために失礼ながら破って開けた。その際に同封の紙片が僕の手に入ったのだ。本そのものの《A・ズイーベンリスト著「ショーペンハウアーの悲劇の哲学」プレスブルク、一八八〇年刊》は昨日もう帯封で君宛てに発送した。

ここで少し前からもう始まっているひどい暑さの日子が僕たちに君のことを考えさせ、そして君がもう直きヴェネツィアを去るであろうと推測させた。ところでコルフ⁽¹⁾へ行くのだろうか、それともコルシカか？どちらも僕たちには非常な驚きだった。どちらの場所でも海風はヴェネツィアよりも清らかであろう、特にコルシカでは蔭も、路地の単なる狭さが提供し得るものより良質であろう。注意しておくが、僕は来月末にまた七五〇フランを君のために受け取るから、それをどうすれば良いかを丁度よい時に報せてくれ給え。

今は猛烈な勢いで校正中だ。シュマイツナーが印刷を始めさせるのが非常に遅れたので、七月一五日のハーゼの記念日までという期限の厳守に僕は殆ど絶望している。サント・ブーヴは分らぬ理由のために三週間このかた完全にストップだ。反ユダヤ主義雑誌⁽²⁾の方はもっと完全にストップしているものと期待する。

ケーゼリッツ氏の最近の長い手紙には大いに感謝している。彼が今後も君と一緒に僕らは心から嬉しい。昔ながらの友情をもって

君の

O

(1) バルカン半島の西岸に近い島。

(2) シュマイツナーが計画中のもの。これについてはオーヴェルベックが既に報せたのであり、五月一二日にガストがオーヴェルベック宛てにニーチェの見解を述べている。オーヴェルベック集、バーゼル大学刊、一三〇頁参照。

一一一、ニーチェより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八〇年六月一日〕

奥さんの様に僕が手紙を書けるのなら返事を出すのだけれど（眼がどんなであろうとも）、しかし恥ずかしいことだが親友よ、君によって僕の心からの感謝を伝えて貰うことにする。言い遅れたが、奥さんの手に成る目録に対してもお礼を言わなければならない、これはナウムブルクから今送られてきて僕の役に立っている。——ズイーベンリストの本はショーペンハウアー文献学と言うべきものだ、これに対して文句をつけるべき点は皆無だ（或いは全部だ）。——三回海水浴をした。間もなく出発しようと思っている、その前に金をここで受け取れば本当に有難い（二五〇 + 七五〇、どうか前回と全く同様に、五〇〇フランのフランス紙幣二枚を、価格表記せずに、ケーゼリッツ宛てにお願いする、僕宛てにはない、僕だと身分証明をせねばならない面倒がある）。現在は五〇〇フランしか送る金がないかも知れないが、そうならば残りの分はこの次にしてくれ給え。出発は迫っている、非常に暑い。

君の友

一一二、ニーチェより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八〇年六月二日〕

親友よ、金が着いた、驚くべき早さだ。僕は何処へ行くのかまだ決まっていなかった。今日もまだ分らない、多分遠くへは行かないで、僕が木蔭の保証を得た森林地帯（クライン地方）⁽¹⁾ だろう。詳細は出来るだけ早く新しい住所と

一緒に。君は二つの神学書を四週間手離すことが出来るだろうか？つまりリューデマンのパウロの人間学と僕に君がしばしば名前を挙げたユステイヌスに関する書だ。それから婆羅門に関するワッケルナーゲルの印刷論文及び仏教に関する彼のその他のもの（未発表？）も欲しい。君は彼に時には会うかい？——僕は君の「クリスト教的性格」《オーヴェルベックの著「現代の我々の神学のクリスト教的性格について」ライプツィヒとケムニッツ、一八七三年刊》をまた読み通した、驚くほど豊かな内容と優れた構成とに非常に大きな喜びを感じながら。僕はこの作品に幾分値する様になった、何故なら僕はその後あれこれについて、しかも右からも左からも考察してきたのだから。J・ブルクハルトが僕のことをまだ考えていてくれるのは非常に嬉しい。

(1) ドーナウ河の支流ザウ河の流域。今のユーゴスラヴィアの北部。

一一三、ニーチェより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八〇年六月二日〕

(続き。)君があの手を書いた時、僕は、今恥じながら認めるのだが、十分の九は何とか分ったと思った。同書の中には実に多くの繊細な線があるので、あらゆる喜びを持つためには本当にちゃんと見つめなければならぬ。——僕の諸著については一言も耳にしない。そのことに僕が不満だなんて思わないでくれ給え！——君が報せてくれたシユマイツナーの最近の企ては僕に嘔吐を催させる。僕は彼が一言も僕にそのことを言わなかったことに腹が立つ。——僕の健康はヴェネツィアではナウムブルクとリーヴァでよりも良かった、僕の外見は良好だ。しかしまだ以前と大差ない。——レー博士から心配な報せ。——君と奥さんに心から感謝しつつ。

君の友

(1) レーは六月一七日にニーチェの母宛てに、アメリカへ転地して療養することを報せている。

一一四、ニーチェより

〔葉書、消印はマリーエンバート、八〇年七月七日〕

親友よ、実に不愉快で幻滅的な旅行の後にやっとこのマリーエンバート（ボヘミアの）に着いた。僕の眼は、僕が途中で見たいわゆる「森林都市」の何処においても僕を殆ど絶望させた。ここでは割に良い。僕は森の中に住んでいる。「隠者荘 Eremitage」というのだ。僕たちが今夏再会出来るかも知れないと夢みている。——僕が最近報せた本を君が手離してもよいなら、送ってくれないか。その後僕は「クリスト教的道德性」について実にしばしば考えを回らした挙句、僕の色々な仮設のための若干の材料が本当に欲しくてたまらないのだ。

君とそして敬愛する奥さんに対し鉱水飲みの林間マラソン選手が祝福を送る。

一一五、オーヴェルベックより

バーゼル、八〇年七月一〇日

わが親友よ、お望みの書籍と、さらにもう一冊を送る、つまり僕の最近のもの 《オーヴェルベックの著「聖書經典の歴史」について。二論文。ケムニッツ一八八〇年刊。同著はカルル・フォン・ハーゼに捧げられた。二三三頁参照》だ、しかしこの中の特に第二論文は、先に出たハルナックの論文と、僕たちの間で争われている原典とを知らなければ君には全く面白くなかろうと思う。僕にとつては今回の仕事は、それが僕の特殊目的に役立つことは別として、最古のクリスト教文獻の發生に関する仕事の準備的価値を持っているのであり、この仕事のためには聖書經典の發生とそれの明確な認識とが大切なのだ。「クリスト教道德」のためには、少なくともその理論面のためには、ユスティヌスとパウロに関する諸著が君に幾多の材料を提供するだろう、エンゲルハルトのものは我慢ならぬほどの冗長さのために君には勿論直ぐいやになるだろうが。この書は僕の個人的使用に既に決めてあるものだから、どうか注意してくれ給え。春に僕

は同書を批評する機会を得て、ユスティヌスの教えについての子供っぽい神学的批判を笑い草にしてやるためにその機会を特に利用した。その批評が一部僕のところに届いたら君に送るとしよう。ところで僕は今日の包みを送るに当って、ためらいが無いわけではない。どうか余り読み過ぎないでくれ給え、そしてマリーエンバートが君の眼に示してくれるかも知れない好作用をそれによって妨げないでくれ給え。僕はそこが特に蔭に恵まれた場所だと聞いた、だからヴェネツィアの最後の日日の後では特に君には有難く感じられるだろう。それにしても僕は、君が今そこにまた姿を現わしたのを知ってすっかり驚いたのだよ、ケーゼリッツがちょっと前に君の出発のことと共に君が目下行方不明だということも報せてきていたのだからね。近いうちに再会するということが夢に終わらないといいね。僕たちは八月末にはドレーズデンにいるし九月末にはナウムブルクのそばを通る。何れかにおいてきつと君と再会することが出来るであろうと僕たちは今までのところ考えている。それから意地悪な冬がまたやってくる、そうすると僕たちは、君がここから去ったことについての昨冬の悲しい考察を繰返す時間と機会とをたつぷりと持つことになる。君の秋の宿駅については僕たちが何時もちゃんと分っている様にしてくれ給えよ。——最近僕たちは君の妹さんからも手紙をまた貰って嬉しかった、そしてフラウが今返事を書くところだ、そして僕たちは為さねばならない挨拶をお互いによろしくと頼み合った。¹とところで妹さんを通じて僕たちがロール嬢と知り合ったことも大いに感謝せねばならない。この人は美しい興味ある少女だが、その生活には陽光だけが欠けていたし今も欠けている。部分的には彼女が自分で自分に与え得る陽光もだ。僕のフラウは彼女を（彼女の方も僕のフラウをだと思うが）非常に好いていて、二人はしばしば会っている、音楽をやるためにも。——

八月の初め頃に僕たちはツューリヒへ行く。——ブルクハルトのコンスタンティヌスはもう今月中に印刷完了する。——本送りに猶予を乞うた僕のヴェネツィア宛ての葉書を恐らくもう受け取っていると思う。心からの友情をこめて

君の

O

《この後一年半の間のオーヴェルベックの手紙は一通も保存されていない。しかし一八八〇年と八一年のそれ等の欠けている手紙は文通の中でしばしば触れられており、それ等はニーチェにとつて特に価値のあるものであった。ペーター・ガスト宛ての葉書（八一年八月三一日）〔書簡全集Ⅳ、七三頁〕を参照せよ、「オーヴェルベックが最近、彼にあつては稀な一種の感激の中で僕に手紙をくれました、特徴的だと思われたのは次の文です、『君の書は最高の生氣で満たしてくれる、何故ならこの書は、慰めを与えることが決して真理の使命ではないという見解によつて実に徹底的且つ誠実に貫かれており、学問に近寄る者が通例持つて一切のサンチョ・パンザ的貪欲さを打ちのめしているからだ』。》

(1) オーヴェルベックが夫人に特に頼んだのは、ニーチェの妹の誕生日（七月一日）に対する祝辞であつた筈である。

(2) 八月二日と訂正されるべきである。

一一六、ニーチェより

〔葉書、消印はマリーエンバート、八〇年七月一九日〕

わが親友よ、君の不意打ちの送り物はこの上なく快適な作用を及ぼす。君自身の論文は非常に繊細なものであり、その中には実に優れた文獻学的空氣が流れているので僕の氣持は本格的に重くなる。文体のしなやかさから推して、君はこれ等を楽しみながら書いたのだと思いたい。——それにしてもエンゲルハルトは何という忌むらしいタイプなのだろう！彼は万事をユスティヌスよりも遙かに良く知っているものだから、そのために恐らくこの人を理解し得ないのだ、高慢さのためだけでも。それに反しリュードマンの仕事は非常に困難な分野での一傑作だ、ただし残念なことに彼は著述家でない。（ワッケルナーゲルには一言感謝の手紙を出す積りだ。）僕の眼は無論非常に悪い、僕は眼をこれ以上出来ない位に大事にしている、しかもそれは實際もはや読むことにも書くことにも堪えられないのだ。時折一五分ばかりを見付けるのは手品だ。——素晴らしい考えた、ナウムブルクでの再会とは。奥さんにもツューリヒの尊

敬する皆様にも心からよろしく。

F・N

一一七、ニーチェより

〔葉書、消印はストレーザ、八〇年一〇月一四日〕

親しい友夫妻よ、その後、悲しい状態だったノゴットハルト越えの中途からはずっと病氣だ、しかも長雨に付きま
とわれている。ロカルノで三日間の滞在を余儀なくされた、最悪の状態で。一ヶ月留まる積り（トランクを待た
め）のこのストレーザで何が僕に与えられるのか僕には見当がつかない——湖は十分南国的とは思われない、もう冬
の気配が感じられる。折返し仏独辞書を送ってくれることが切に望ましいのだがね（小さくて、立派な印刷のもの
を）。宛先はマジョーレ湖（イタリア）、ストレーザ局留。——バーゼルの数時間は実に元氣をつけてくれたノ心から
感謝しつつ

F・N

（一）ニーチェは八月二〇日マリエンバートからガスト宛てに「九月初めに私はナウムブルクへ行きます。そこへオーヴェック夫妻
もきます」と書いている。ニーチェは九月初めから一〇月八日までナウムブルクで過ごして後に南へ向い、バーゼルに立ち寄ってか
らゴットハルトを越えた。

一一八、ニーチェより

〔葉書、消印はストレーザ、八〇年一〇月三二日〕

わが親しい友夫妻よ、自分の誕生日を僕は今回は忘れていた、初めてのことだ——どうしてこんなことになったの

だろう？多分僕は他の色々な考えで頭が一杯になり過ぎているのだ、そしてこれ等の考えの必然的結果として、僕は日に十度も自分に向って「自分なんか何だ！」と叫ぶことになるのだ（これが僕自身に元氣をつけるやり方なんだ）。つまり僕は実にしばしば、自分の弱さ（精神や健康やその他のものにおける）と強さ（さまざまな希望と課題とを觀察することにおける）とを一緒に堪えるにはどうすればよいのか分らないことがあるのだ。僕の孤独は非常なものだ。ストレーザにおいてのみならず思想においても。それだけに益々慰めになるのが真の友人たちの一つ一つの言葉であり行為だ、ああ、全くの心のうずきだ！

心から感謝しつつ君たちの

F・N

一一九、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八〇年一月一七日〕

貴重な友よ、単なる報せだけだ、僕はやっとリグリア海岸に着いた、そして差し当りジェーノヴァから余り離れずに暮すだろう。僕たちが最近手紙と葉書を交して以来、あらゆる禍と堪え難い事どもが僕を襲った、僕はそれより悪い時期を殆ど思い出せないほどだ、僕は締め金の中の熊の様に苦しんだ、それで卑小な陰惨な気持も心に巣くった——甚だ初冬のだ、自然と同じく。ところで僕は灰を思いフェニクスを思う。上昇するのだ！愛をもって僕を思ってくれ給え！

140

君たちの友

（どんな場合でも、ジェーノヴァ局留。）

一一〇、ニーチェより

〔ジエノヴァ、一八八〇年二月〕

親友よ、君は仕事に没頭していることだろう、しかし僕の二、三の言葉が君の妨げにはなるまい。仕事をしている君を考えることは僕にはいつも実に快い。まるで一つの健康な自然力がいわば盲目的に君を通じて働きかけてくるかの様だ、しかもそれは一つの理性なのであり、その理性は実に繊細で扱いにくい材料の中で働いているのだから、たとえそれが性急にそして懷疑的にそして時には絶望的に振舞っても僕たちは我慢せねばならないだろう。貴重な友よ、僕は、君の生活の演劇をあの人に真近で目撃することを許されたことを君に本当に感謝している。事実、パーセルは僕に君の像とヤーコプ・ブルクハルトの像とを与えてくれた。僕は、単に認識によってだけではなしに、大きな利益をこれらの像から引き出したと思っている。生活と認識とにおける一つの独自で本質的に隠者的な傾向を持った品位と優美、この演劇が僕の運命の限りなく有難い恵みによって僕の「家に贈られた」のだ——だから僕があの家を去る時の気持は、あそこに入った時とは違っていたのだ。

今は僕の思念と努力の一切が、理想的な屋根裏部屋の孤独を実現することに向けられている。僕に多くの、実に多くの苦痛を教えてくれた僕の本性のあの止むに止まれぬ、そして素朴極まる諸要求の一切が、その屋根裏部屋の孤独においては正当な権利を得るに到るのだ。もしかするとうまく行くかも知れない！僕の頭痛と滑稽なほどさまざまな僕の窮状との日日の戦いは非常な注意深さを要求するものだから、それで僕はその際に卑小になる危険を冒すことになる——ところでその戦いは、僕を支配している実に普遍的で野心的な衝動を抑える重しなのであり、もし大きな重しがなければ僕が痴呆にならざるを得ないほどにその衝動の支配力は強いのだ。今僕は非常にひどい発作から起き上ったところだ、そして二日間の苦しみが振り払われたとたんにもう僕の痴愚は、朝早く目覚めた時から、またもや全く信じ難い事柄を追いかけている。そして僕は、どこかの屋根裏部屋の住人たちに曙光がこれ以上好ましくて願わし

い事柄を照らし出してやったことがあるとは思わない。僕がこの隠遁を固守するのを手伝ってくれ給え、僕のジェーノヴァ滞在を知らないことにしてくれ給え、——可成りの期間僕は人間と交わらずに、言葉の分らぬ町の真中で暮らさねばならない、ねばならないのだよ——繰返し言っておく。僕のことを全然心配しないでくれ給え、僕は、数世紀が無であるかの如くに生活し、僕の諸思想を追うのだ、日付や新聞のことを考えずに。

僕はまた、今日の「理想主義」の活動、特にドイツのとは、もはや全く関係する気がない——僕たちはみんな自分の仕事をしよう、いずれ後世が僕たちをあれこれと整理するだろう、或いはしないかも知れない。ただ僕は自分を自由だと感じただけだ、そして然り／をも否／をも言わずに済みたいだけだ、例えば僕が君に同封して送るこの書のような純粹理想主義的小著⁽²⁾に対して。これは、今日の「ドイツ精神」の中でも僕が到底知る気になれない最も下なものだ——ほろりとさせると同時に不遜であり非常に無趣味だ。一度でいいから読み給え、奥さんと一緒にだ、それは勿論だ、それからこれを燃してしまつて、このドイツの腫れ物から清浄になるためにプルタルコスブルートゥス及びディオンの伝記を読み給え。——では元氣なれ、親友よ、僕は君に一体君の誕生日のお祝いを言つたかしら？言わなかつた。しかし僕自身にはそのお祝いを言つたのだよ。愛をもつて

ジェーノヴァ、局留。

君の友

(1) 無論、パウマン洞穴のこと。

(2) エードアルト・フォン・ハルトマンの「道德的意識の現象学」(ベルリン、一八七九年刊)であるかも知れない。ハンゼル版ニーチェ全集第三卷一四五頁参照。

一一二一、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八〇年二月五日〕

ジェーノヴァ、局留。

貴重な友よ、僕の様になにしか郵便局へ行かないと、こんなことになる／＼そこに君の親切な、元気づけてくれる友情の手紙が来ていたのだ、そして君宛ての僕の出す前にそれを手に入れることが出来た筈だったのだ——僕の便りから君は少なくとも、元氣と辛棒との若干の資本が、消尽されるために依然として残っていることを見て取ったろう。序でながら僕の状態は悪い——しかし僕はジェーノヴァ及びその近傍の海風と良い道路とを賛美する。——金とシユマイツナーとに關しては申し合わせた通りをお願いする、彼には報せてある。心から奥さんによろしく

F・N

一二二、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年一月八日〕

貴重な友よ、敬愛する奥さんと共に君の信頼すべき確実な流儀で、君もまた、新しい一〇年に足を踏み入れたことだらうね／＼僕は君を思うことが実にしばしばだ、特に僕が午後、殆ど毎日、海辺の僕のひっそりした岩の上に坐ったり、或いは陽を浴びて休らうとかげの様にねそべったりしながら頭の中で精神の冒險へと出発する様な時には、そんなのだ。僕の食餌と一日の分け方とは、長い間には僕に好作用を及ぼすに違いない／＼海風と多くの澄んだ空——や々と分ったのだがこれが僕には欠くべからざるものなのだ／＼暖かさが今年は去年よりも少ない、僕はストーヴを持っていないのだ——しかしここでストーヴを持っている者があるか／＼小さな本とそして同時に送った僕の手紙とがうまく君の手に入ったかどうかを僕はまだ報されていない。誠実をもって君のものであり君たちのものなる

F・N

一一三、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年二月三日〕

そうだ、貴重な友よ、僕はまだジェーノヴァに居るのだ、そして冬の最もきびしい部分は終わった様に思う。初めて冬にストーヴなしで、手足が冷かなくていたことも実にしばしばだった。僕はまたもや、クリスマス以前よりも病んでいる、そして頭痛の無い時が殆どもう無い、時々は一切の事柄にすっかりうんざりしてしまう。どうか、次の収入をまたシュマイツナー氏へ送ってくれ給え、君が報せてくれた五〇フランも同様だ。心配し給うなよ、昨年の冬に比べれば僕はうまく過ごしたのだからね、そして春がまた僕に好作用をもたらすかも知れない。——眼はまだ殆ど僕の意のままにならない！僕が返事を出さないで忘恩的に見えるのを許し給え、親しい良い友よ。心から君と奥さんの元気を祈りつつ

F・N

一二四、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年三月一八日〕

親しい親しい友よ、今日は一言だけ！君が真つ先に知らねばならないことがあるのだ——ケムニッツで僕の新しい原稿『曙光』が印刷されている。これは、僕の名前に結ばれ続けるであろうと思われる著書だ。——何たる重荷を僕は肩に負ってきたことか！そして何たる重荷を僕は今こそ自分に負わせたことか！さあ、前進だ、眼を背後へ向けたり横へ向けたりせずに！僕は非常に感動している、そして君の誠実な手を握り得ればなあと思う。僕の二、三の真の友人たちはこれから一層、生を貰いて僕を背負わねばならぬだろう、僕は彼等にそして君に面倒をかけるだろう、しかしどうにも致し方ない！

心から君の友

一二五、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年四月六日〕

奇妙だ！君の手紙がきた前の日にね、わが親友よ、僕は遂にローデへ一通の手紙を出したのだ。彼が君たちのところにいるということを聞いて僕は実に嬉しかった——それは彼にとって保養旅行の様なものだ。僕も君をそんなに近くに持っていればいいのだがなあ！僕だって信頼出来る仲間から若干の激励とそして親切な慰めを受けることが本当に必要なのに。最近の月々のこの地は僕に思わしくなかった、今後のために憶えておこうと思う（天候の動揺が余りにも大き過ぎる——しかしジェーノヴァの冬の月々は工合が良かった）。——僕が報せたこと、つまり僕原稿がケムニッツで印刷中だということを僕は、おかしいことだが取り消さねばならない。シュマイツナー氏は六週間前から僕に対して全く沈黙したきりであり、全くもう何の返事もよこさない。僕原稿がそもそも彼の手にあるのかどうかをさえ僕は全然知り得ない。全く不可解だ！——君と奥さんに心から感謝しつつ。

一二六、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年四月二八日〕

貴重な親友よ、日曜に僕はジェーノヴァを何ヶ月か離れる、そしてレコアーロ（ヴィチエンツァ付近 *presso di Vicenza*）というイタリアの避暑地へ行く、そこへはケーゼリッツ氏もくる。そこへ「緑のハイムリヒ」の新版を送ってくれるかい？どの年にも一冊の良書を読むことが、脱線でないことは確かだ（去年は僕たちは「晩夏」を読んだ）。——ローデ夫人が自身についての長い手紙をよこした、しかしそこに書かれていた二つのことが僕には殆ど悲しかった。1、あの様な人なのに生の方向についてはこんなに無思慮であること、そして2、言葉と言ひ回しとおける悪趣味の多量なこと（ドイツの諸大学では「機智」と呼ばれているかも知れないが——天が僕たちをそれから守って

くれる様に／＼。君と敬慕する奥さんと良い夏と晴れた空が恵まれる様にと祈る！(僕の場合には殆ど一切が空にかかっている、つまり僕の工合は良くなかったのだ！)

一二七、ニーチェより

〔葉書、消印はレコアーロ、八一年五月一八日〕

わが親友よ、「緑のハインリヒ」の調達に対して感謝のほんの一言だ、これは僕にとって夏の本当の喜びとなるに違いない。君が僕の次の四半期の収入をシュマイツナーへ送る時に、どうかこの本代を差し引いてくれ給え。——僕の状態は悪い。印刷は、さらに二ヶ月以上引きずられるかも知れない。——ところで一つの楽しい、非常に楽しいお報せを付け加えよう、僕たちの友ケーゼリッツは一流の音楽家なのだ、彼の作品は新しい独特な魅力のある美しさを持つており、この魅力においては現存の何びとも彼に匹敵しない。快活さ、優美さ、誠実さ、さらに無邪気な愉快さから無垢の崇高さへと高まって行く感情の大きな曲線。同時に技術的には完全であり自分自身への諸要求においては繊細だ、これは、このがさつな世紀にあつては言い様のないほど爽やかな感じを与える様に僕には思われる。その上さらに、この音楽と僕の哲学との間には或る親近性が存在する。つまり後者は実に良い響きの代弁者を見出したのだ！——

一二八、ニーチェより

〔葉書、消印はレコアーロ、八一年五月三一日〕

親友よ、今ケーゼリッツ氏は帰りの旅への出発準備をしている。それがどうやら必要なのだ——僕たち双方のため

に。僕の健康は、あらゆる用心にも拘らず、この様な共同生活にはもう堪えられない、最悪のバーゼル風の発作が何度もあった。——僕は校正刷のためにまだここに留まる（明るい夏の太陽、そして僕の哀れな眼のためにも僕の頭が必要とする様な長い良い散歩のためにも、不変の配慮をしてくれる場所を見付けることが恐らく不可能なこと、以上が僕を時折殆ど絶望させる。去年僕は可能性がありそうに思われた場所を細心に選抜した後に八回幻滅を体験した、そしてこの夏も全く同様に始まる！）。六月半ばまで留まることは確かだ。「緑のハインリヒ」の続編は後に（八月頃）お願いすることにする。

君と奥さんとに心からの誠実をもって

F・N

一二九、ニーチエより

〔葉書、消印はギルス・エンガディーン八一年六月八日〕⁽¹⁾

わが親友よ、僕はまたエンガディーンにいる。最近はずっと、非常な苦痛と危険が続いた、僕は生きてレコアローを離れようとは思わなかった。エンガディーンは二年前に僕を生につなぎとめた、そして今度もそれをやってくれるだろう、僕にとってこれ以上の場所は何処にもない。——図書館もしくは読書クラブの若干の本を借りたいのだがね、つまりヘルワルトの二冊の書、1、文化史、2、地球とその住人。（彼は歴史、旅行その他の最新の文献を知っている。）それからクローノ・フィシャーのスピノーザに関する書。——シュマイツナー（金を受け取ったことを報告してきた）は君に僕の書を送ったと思う。済まないが、二部送ることは不可能だった、僕はそう望んだのだが。さらに僕が残念ながら付け加えねばならないのは、それが全く朗読のための書ではなくて、孤独な書でありたいと最高度に欲していることだ。——君の「クリスト教文獻——発生史」の進捗を聞くことは何と気持のよいことか！何と多く

の質問を僕はそれに対して用意していることか！——緑のハインリヒは僕の（根本において激越な）状態にとつては少々微細画的で多彩であり過ぎる。しかしこれは詩的ないたずらの典型であり、真剣さの典型でさえあるかも知れない。

君の誠実な友

F・N

(1) 七月八日の誤りである。ニーチェは七月四日にズイルスへ移った。七月八日のガスト宛の手紙を参照のこと。

一三〇、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス・エンガディーン、八一年六月三日⁽¹⁾〕

わが親友よ、今度のことにおいても僕たちの友情がゆるがず、否、新たに確認されたことは、非常に嬉しい《オーヴェルベックが「曙光」の印象を述べた手紙に關係しているものと思われる》——僕の一番好きな人たちが僕の「ざっくばらん」のためにさらされるあらゆる熱風と冷気の試練のことを時々僕は不安に駆られながら考えるのだ。クリスト教に關しては、この一つのことだけはきつと信じてくれるだろう、即ち僕は心の中でそれに対して卑劣であつたことは決してなかつたし、子供の時からその諸理想のために誠実な努力を色々とやってきたのだ、無論結局いつも全くの不可能という結果に終つたがね。——ここでも僕は大いに悩まねばならない、今度の夏はいつもより暑くて電気が多くて、僕には都合が悪い。それでも僕は、上部エンガディーン《原典では、上方の土地》のこの部分ほど僕の性質に適した場所を全く知らない。——バウムガルトナー夫人が非常に親切でねんごろな手紙をくれた。——僕自身は僕の書をまだ受け取っていない。——ヘルワルトの書を有難く受け取った。これは或るジャンルの諸説の便覧だね。

君と奥さんに心から愛着しつつ

F・N

どんな意見で僕がまだ喜ばせ、どんな意見で悲しませるのか、僕にはもう全く分らない。

(1) 七月二三日の誤りであり、次の手紙の後に置かれるべきもの。七月二一日のガスト宛ての手紙を参照のこと。

一三二、ニーチエより

〔葉書、消印はズイルス・エンガディーン八一年七月二三日〕

御免よ、わが良き親友よ！全く僕の書き方の乱暴さときては、誰ももう読めやしない、僕もだ！（どうして僕は僕の考えたことを印刷させるのか？僕に読める様にするためさ。これも御免よ！）——そういうわけで、

ズイルス（エンガディーン）局留。

つまりグラウビュンデンにもう一つのズイルスがあるのだ。

今激しい二日間の発作から光に向って蘇りつつ、再び生を信じつつ

誠実をもって君のそして君たちの

F・N

一三二、ニーチエより

〔葉書、消印はズイルス・エンガディーン、八一年七月三〇日〕

僕は全く驚き、全く歓喜している、僕は一人の先驅者を持つているのだ、しかも何という先驅者だ！僕はスピノーザを殆ど知らなかった《一四七頁「クーノー・フィッシャーのスピノーザに関する書」を参照のこと》、僕が今彼を求めたのは

一つの「本能的行動」だったのだ。彼の全傾向が僕の傾向——認識を最も強い情熱と化する傾向——と同じであるばかりでなく、彼の学説の五つの主要点において僕は自分を再発見するのだ、実に異常で孤独なこの思想家はまさにこれ等の点で僕に最も近いのだ、つまり、彼は意志の自由を、目的を、道徳的な世界秩序を、非利己的なものを、悪を否定している。勿論、相違は非常に大きいけれども、それ等はむしろ、時代の、文化の、学問の違いにある。要するに、非常な高山の上での様に実にしばしば僕の呼吸を困難にしたり血をふき出させたりした僕の孤独が、少なくとも今は、二人の孤独なのだ——不思議だ！

ところで僕の調子は全く僕の希望に添わない。例外的天候はここもだ！大気の諸条件の絶え間ない変化！——これが僕をヨーロッパからも追い立てる！僕は澄んだ空を数ヶ月間持たねばならない、そうでないと僕は進歩しない。二日乃至三日続きのひどい発作が、もう六回あった！！——心からの愛情をもって君たちの友。

一三三、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス・エンガディーン、八一年九月五日〕

親しい、そして哀れな友よ！——何故なら僕は恥じ入りながら僕の窮境の厚かましさを思うから！——送金は一〇月に延期しよう。ジェーノヴァ局留だが何が入っているのか表示なしの一通の書留の手紙が、もう僕の手許にきている。職工銀行のみならずバーゼルでの金の投資の一切に関して、その際に僕の名前を用いることは望ましくないのだよ。しかし僕の名前が必要な場合は、ツューリヒでの投資の方がいいと思う。

僕は悪い状態を通り抜けてきた、まさに意地悪い気狂い染みた天候の影響で全体的デカダンスが始まったのだ。エングディーンへの期待は今回は恥ずかしいことになった。しかし他所なら僕の調子をもっと良かったということもなかろう、少なくとも、新しがりのために季節までもごちゃまぜにしているこの興奮したヨーロッパではね。ここで

は、深い雪の冬、秋の嵐、夏の雷雨、三月の露の日がごちゃごちゃに入り乱れた。
感謝している君の友

F・N

一三四、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス・エンガデーオン、八一年九月六日〕

パウマン洞穴からの小詩

賢者の知恵が言っている。

思想が湧かなくなったなら、

お茶を一杯飲みなさい、

そうすりゃ思想が湧いてくる、

お茶はギリシヤの人たちが

まだ知らなかった神なのだ、

「機械ガ作ッタ神」なのだ。

——賢くあらうよ君と僕ノ

（あるとき一方の洞穴ぐまがもう一方の洞穴ぐまに、お茶の飲み方を教える時にそう言った。）

一三五、ニーチェより

〔ズイルス、一八八一年九月〕

貴重な友よ、僕たちの間は好調だね。そして僕の書に関しては、僕は真面目な冗談だがこう言いたい、「これは最も強い精神的な飲み物に属する」と、少なくとも僕自身が疲れや無気力を感じた場合にこの書から感ずる作用によって判断すればね。結局のところ、これは僕の幾つかの開始の中の一つの開始なのだ——何たるものがまだ僕の前にあることか？僕の上にあることか？何時かは僕は、二、三年の間、世の中から全く姿を消すことが必要になるだろう——

あらゆる僕の過去と人間関係を、そして現在を、友人たちを、親類どもを、一切を、何もかもを忘れ去ってしまうために。その時には、勇敢であることが肝腎だろう、そしてわが愛する友よ、君も君の昔ながらの大きな誠実を、僕への誠実における君の勇敢さを、さらに最高の試練において保持せねばならないだろう。僕は結局は一人の厄介な仲間だ、そうだよな？ところで友ロームントはそうは考えていない、彼には少なくとも僕は何も厄介をかけたことがないからだ——彼は元気に陽気にこう書いてよこした、彼は「神——魂——自由——そして不死についてのカントの教えを再び打ち建てるのだ」と。これは僕を実際楽しくさせた。僕はまだ全然「有害で不道徳な」影響を及ぼしていないらしいからね（むしろ——全然何の影響も！）——僕たちは上機嫌でいよう。僕たちは自由人なのであって「婢女の子等！」（『ガラテヤ書第四章三二節からの引用』）ではないのだからね——ところで次から次とお願ひばかりだ。済まない。——今回は僕自身が金を受け取りたい。僕は九月二七日にここから旅立つ、それまでにそれを貰うことが可能だろうか？何時君はバーゼルへ帰るだろうか？ジェーノヴァへ送金して貰うことは、僕がそこでは身分証明書を持っていないという難点がある（僕は旅券を持っていないし、普段はその必要もないのだ）。

シュマイツナーには今後は僕の貯金をもう渡さない積りだ、少々用心せねばならない理由があるのだ、彼は無謀であって、前以て許可を乞うことをせずに色々なことをやる。親友よ、今や僕の期待は、今後バーゼルの年金から余った分が全部君によつて蓄積されて、そして利が利を生んで、六年が過ぎた後に僕がまだ暫くはそれで生きられるということだ（教えて欲しいのだが、この六年の年金の最後の支払期は何時なのかい？）。僕は生の「高み」に、つまり、生が次第に僕に課した僕の課題の「高み」にいる、そして何とか出来るならば今後の四年間を一切の如何なる外的妨げもなしにまさにそれ等の課題に捧げねばならない、そして他のことは全然何もはや考えてはならないのだ、その援助をしてくれ給え、誠実な者の中の最も誠実な君よ！

リトレの書を僕が読まないであろうことは確かだ、そしてケラーの「緑のハインリヒ」も同様だ。僕の眼はもうそ

の様な「視力の贅沢な支出」を僕に許さない。内緒で言うが、僕が眼を働かせても良い僅かなものは、今は殆ど生理学的研究と医学的研究とに限られている（僕は実に悪い教育を受けてきたノ——それで実に多くのことを実際に知らなければならぬ）。どうか「緑のハインリヒ」の第二巻はヴェネツィアにいる僕たちの「緑のハインリヒ」へ送ってくれ給え、彼は今丁度彼の素晴らしい総譜——金銀線細工そのものとも言える——を書き上げたところだ。

——僕はタイプライターの発明者、コペンハーゲンのマリング・ハンセン氏と手紙を交した——一週間の練習でもう眼を全く使わなくてもよいその様な器械は僕にとっては測り知れない価値を持つと思うのだが、「貧乏な男」の僕には全く不釣合なものだ——ケース付きで「発送出来る様に荷造りして」、つまりまだ運送以前でその値段は三七五マルクだ。それは六ポンドの重さで、ハインチの長さがある。活字見本を同封する。

君を通じて書店から若干の本を取りたいのだがね。

1、O・リープマン、現実の分析。

2、O・カスパリー、トムスンの仮設（シュトゥットガルト、一八七四年、ホルスター出版社）。

3、A・フィク、「原因と結果」。

4、J・G・フォークト、力。ライプツィヒ、ハウプトとティシュラー共同出版社、一八七八年。

5、O・リープマン、カントとその亜流。

それからツューリヒの箱の中の僕の本の一つが非常に必要なのだがね。スピール、思索と現実——これは仮とじだ、従って仮とじ本の箱の中にあり、二巻から成っている。

ツューリヒの読書クラブ（もしくは図書館）に「哲学月刊誌」があるだろうか？その一八七三年度第九巻と一八七五年度第九巻とが必要なのだ。それから雑誌コスモス第一巻。

デュブワールレモンの演説の全集版というのはあるのだろうか？

最後だよ、最後だよ！薬局へも行って貰いたいのだよ、僕の個人的薬局を補充しなければならないのだよ。お願いしたいのは

1、燐酸鉄

2、燐酸カリ

3、硫酸ナトロン

4、塩酸ナトロン

それぞれ一〇グラムを粉末で。十分よく包装して。おこらないでくれ給え、そして急がないでくれ給え、出来るだけ序での折にやってくれ給え。僕は既に僕の厚かましい数々のお願いのために、敬愛するお義母さんに実に厄介をかけてきている、しかも僕はお義母さんに、そして君に、そして奥さんに、そしてツューリヒの君の身内の皆さんに断然好印象を残し続けたいと思っている！

F・N

- (1) 送金に関する記述から見て、一三三番よりも前のものである。八月二一日ガスト宛に「ケラーの緑のハインリヒ第二巻を貴君に送るようオーヴェルベックに頼みました」と書いている。内容全体から見ても、永遠回帰体験の直後の時期のものであり、八月一四日のガスト宛ての手紙よりは後のものである。
- (2) 「アルコールの」という意味もある。
- (3) ケーゼリッツの名はハインリヒである。

一三六、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス・エンガディーン、八一年九月一八日〕

奥さんの親切でしかも正確な御教示に感謝する。ところでその様な壺は僕の所帯には合わない、僕の所帯は僕自身

と同様にかりそめのものでなければならず輸送簡単でなければならぬのだ（既に話したタイプライターが合わないのと同じだ）。雑誌はやめだ！探していた論文はリープマンの「分析」にも載っている。序デナガラ、冗談ハサテオイテ、黙ッテイタイトハ思ウノダガモウ黙ッテイラレナイコトヲ話ソウ。僕ハマサニ絶望セントシテイル。苦惱ガ生命力ト意欲ヲ打ち負カスノダ。オオ、何タル月々ヲ、何タル夏ヲ過ゴシタコトカノ天空ノ中ニ変化ヲ見ルタビニ僕ハ肉体ノ責メ苦ヲ経験シタ。凡テノ雲ノ中ニハ、突然僕ニ両手デ掴ミカカッテ完全ニ不幸ノ中ニ打ちノメシテシマウ稲妻ノ様ナ何カガアル。五度モ僕ハ、癒シテクレル死ヲ呼ンダ、ソシテ昨日ガ最後ノ日デアレバヨカッタノニト望ンダ——空シイ望ミダッタ。永遠ナ清朗ノアノ天空ハ地上ノ何処ニアルノカ、アノ僕ノ天空ハ？左様ナラ、親友ヨ。⁽¹⁾

(1) 片仮名の部分はラテン文である。ペルヌリ書が「オーヴェルベック宛ての便りの中には見事なラテン語で書かれた葉書が一通ある」
(第一巻一五四頁)と述べているのはこれである。

一三七、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス・エンガディーン、八一年九月二〇日〕

親友よ、金も着いたよ、素晴らしい焼菓子もだ、これを送って下さった奥さんに心からの感謝の意を伝えてくれ給え。一週後に僕は出発する。フィクの論文は今はいもう不要だ。肉体的精神的必要のために僕がこの夏に送ったさまざまな通達を、どうか好意をもって、君のところでファルケンシュタイン家の皆さんとどうまくやってくれ給え。直ぐにまた僕のための金が君の手に入る筈だね、それをそのために用立ててくれ給え。——ケーゼリッツに「緑のハイシリヒ」の第二巻を送ってくれただろうか？——友ローデは三ヶ月前に送った本と手紙とに対する返事をすっぱかしている／彼をまたもや悩ませているのは何なのだろう！——持ちこたえるための忍耐力をちびちびと集めなければならない。確かに、僕には、持ちこたえねばならない理由がまだあるのだ。——

君の友

一三八、ニーチェより

〔葉書、消印はジエーノヴァ、八一年一〇月一四(？)日〕

さて、古い親友よ、僕はまた僕の町ジエーノヴァにいる、僕の知っている最も非近代的な町であり、同時に生命力で充満している町だ——徹頭徹尾非浪漫的でしかも極めて非通俗的だ、それで僕は、この地の僕の保護聖者コロンブス、バガニーニ、マツィーニの保護下に生き続ける積りだ、この人たちは一緒になって彼等の町を実に良く代表している人たちだ。君と君のお義母さんから受けた激励がエンガディーンで僕の受けた唯一の激励だった——僕は健康状態の恐るべき変化を経験してきた、そして僕の出発と旅行は全く馬鹿らしいほどのエネルギーを費すことによつてのみ可能となったのだ。

F・N

一三九、ニーチェより

〔葉書、消印はジエーノヴァ、八一年一〇月二日〕

氷の様な雨、激しい風、要するにもう冬なのだ、きびしい冬だ、悪い状態が懸念される。J・ブルクハルトの言は尤もだ、けれど殆ど盲目の僕には今は別の町を試してみることも旅行することも総じて堪え難い拷問になってしまっている。この町は(ここの住民も)僕の性に合っており、僕に勇敢さと努力とを堅持させてくれる。ああ、友よ、その後何という状態だったことかノどの日も一つの戦いだ——毎日僕によつて消費されるエネルギー、忍耐、思慮、工夫の量はまことに少なからざるものだ、しかし誰もこれを詳しくは知らないのだからこれを計算してくれるひと

誰もなからう——そして結局は僕の生は怠惰な生と呼ばれたりさえする。——金を六ヶ月定期で預けてくれ給え。
——僕は君と君の家族の皆さんをいつも心から感謝をもつて思っている、良い親友よ！

F・N

一四〇、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年一〇月二八日〕

親友よ、次の書を帯封で送らせてくれないだろうか（君のライブツイヒの書店からだ、そして、僕が直接にその書店に書籍注文出来るように、且つ、支払いは毎年君自身の支払いと同時に行なうというように協定して貰えないだろうか？）

フワサック、気象学、エムスマン独訳。

ライブツイヒ一八五九年刊。

（大気中の電気が僕に及ぼす恐るべき作用のためなのだ——この作用は今後も地上の僕を追い回すだろう、僕の体質にとってもっと良い生活条件が存在せねばならない。例えば、メキシコの高原の太平洋岸に（スイス植民地「新ベルン」）。非常に、非常に、苦しんだ、くる日もくる日も。

君のF

一四一、ニーチェより

（ジェーノヴァ、八一年二月一四日）

わが親友よ、この僕たちの生とは何なのだ？海に漂う一そうの小舟であり、それについて確実に分っているのはそ

れが何時かは転覆するだろうということだけだ。ところで僕たちは、お互いに誠実に近さを保ってきた二、その古い良い小舟だ、そして特に君の手は、僕が「転覆」しないように誠実に助けてくれた！それで僕たちは僕たちの航海を続ける、それぞれがお互いのために、実に長く！実に長くだ！——僕たちはお互いがいかなかったらどんなに淋しいことか！幾らか滑らかな海と宜しき風、そして何よりも太陽——僕自身のために願うものを僕は君のためにも願う。そして、僕の感謝の気持がこの様な願いとして表わされ得るだけであって風や天気を全然どうすることも出来ないのが悲しい！

フワサツクの書が着いた、君の書店は早速そして安価にやってくれた。この医学的气象学はアカデミー賞を受けたにも拘らず残念ながら小児期の学問であって、僕自身の必要という点から見れば一ダースの疑問符を殖やすだけのものだ。今はもっと多くのことが知られているのではなからうか——僕はパリの電気関係陳列会へ出掛けるべきだった、最新知識を学ぶためもあるが陳列品としてもだ、何故なら電気の変化を予感する者として、またいわゆる天気予報者として僕は猿どもに劣らないし、恐らくは一個の「特製品」であるだろうから。どんな服装（或いは鎖、指輪その他）によってあの強烈な作用を最も良く防ぎ得るかをハーゲンバッハならば教えてくれることが出来るだろうか？何しろ自分をいつも絹のハンモックに入れて吊るしてばかりはいられないからね！自分を完全に吊るして縊死する方がましだ！断然一氣にだ！

ゴットハルト・トンネルは何時出来上るのだろうか？何時通れる様になるのだろうか？このトンネルは僕を君のところへ、そして医者たち（眼と歯の医者を含めて）のところへ連れて行ってくれる筈なのだ。僕は一度ゆっくり医者に相談してみようという氣になったのだ。（このトンネルはジェーノヴァ人の戸口の前に作られているので、彼等は感謝の極にあり、今はどのスイス人に対してもそのために愛想がいい。）

僕の眼はどんどん駄目になる——ほんのちょっと使った後にも非常に痛むことが僕をまさに学問から離れさせてい

る（ひどい弱視を全く度外視しても）。何と長いこと僕は読むことが出来ないでいることか!!

ロームントの書を僕は読まなかった——しかしざっと検分したところでは、これは禁断の、僕たちには禁断の道をこそそこそと忍び歩いている様なものだ——こんなやり方を僕は好まない!——

パエズィエロの傑作は秘密ノ結婚 *matrimonio segreto* だ、その後にはチマローザが現われて、同じ歌詞をもう一度作曲した、そしてだ、これもまた彼の傑作となったのだ。そして今やケーゼリッツが登場し、——何と珍しいことには——その三度目の作曲を行なって、実質的にはもう仕上がっている。歌詞はそれだけの値打がある——思想の冒險性、大胆さは僕を考えさせた。僕がケーゼリッツを知っている限りでは、僕はこの特徴を喜んでゐる、つまり自負や不遜は彼には非常に縁遠いものなのだ。——「夜よ、おお、やさしき」⁽¹⁾は、君の言から推測して、僕に對してとは少々違つた印象を君に与えたのかも知れないと思う——そしてそれも尤もだ。とに角、いずれの場合にも、作者の名譽となる印象だつた。——

親しい奥さんに心からよろしく、君の友なる

フリードリヒ・ニーチェ

一八八一年一月一日、ジェーノヴァ

(1) ゲーテの唱歌劇「戯れ、企み、仇うち」の第四幕をガストが作曲したもの。ベルヌリ書第一卷四五頁（注47）参照。

一四二、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年二月六日〕

親友よ、君の良き手紙に對して感謝の一言のみなるを許し給え——眼がもう「書くことにおける氣前の良さ」をほんの少しも許してくれないのだ。書籍の箱についてはもう少し考慮の時間を与えてくれ給え。年金が入ったら、その

中の五〇〇フランをまた、局留の書留で、しかも金額を表記せず、従って書簡として送ってくれ給え。僕の古い一八七六年の旅券がまだ郵便局では通用するのだ。——君の本屋に僕は三マルク九〇プフェニヒ払わねばならない。——ライプツィヒで今、レー、ゲルスドルフ、ロームントが食事を共にしていて、大いに僕たちのことが話されている。——タイプライターが不可欠となり、それを頼んだ、僕の妹はそのためライプツィヒへ行ってそこでその仕事ぶりを見てきた。——何回かのひどい発作。しかし天候は全体としては非常に健康的だ。

心から元気を祈りつつ

N

一四三、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年二月二二日〕

親友よ、お報せと尽力とに感謝する。今日僕はレー博士を通じて、シュマイツナー氏が彼の出そうとしている雑誌のために協力者を募っていることを知った、君と僕とが確かに承諾したと断言しつつだ。何たる厚かましきだ。本当は、彼はまだ僕に何の問合せもよこしていないし、僕はこの雑誌に関係する気なんかさらさら無いのだ。——上述のやり方で彼はフォン・シュタイン博士（ハレの私講師）を手に入れた。——僕は一つの原理をも、一つの偉大な名目をも、さらに、何らかの必要をも見て取ることが出来ない——この雑誌は何のためなのだ？しかもヴィーデマン氏を僕は、編集者として実に不適当だと思っている。

来月はレー博士が訪ねてくることになっている、その著「良心」は大いにはかどっている。変らぬ愛と感謝をもつて

F・N

一四四、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八一年二月二八日〕

君に、そしてロートプレッツ夫人にも、クリスマスに手紙を書こうと思った——ところが病氣になつてしまい、そしてまた起き出したのだけれども直り方が悪くて午後はいつもまたベットにつかなければならない。それでこんな葉書になつてしまつて済まない、そして敬愛する夫人にも僕を大目に見て下さる様お願いする。新年が多くのものを旧年よりも向上させ、そして僕をも若干修繕してくれればいい／さて書籍はナウムブルクへやつてくれ給え！（もうちょつとで僕はこう言いかけた、悪魔にやつてくれ／と。何のためにこの半盲動物の僕はまだ本を持っているのだろう／それは重荷でしかないのだ、それがそもそも誰にとつて重荷になっているのかを考えるならば特にそうなのだ！）金はいま／着いた、古い旅券は新品同然に通用した。——シュマイツナー氏が否認している事柄を物語つたのはフォン・シュタイン博士だ（レーとの会話において）。——ゲルスドルフは見事なやり方で僕との友情を回復した。——誠実をもつて君の

F・N

一四五、ニーチェより

（ジェーノヴァ、一八八二年一月二九日）

わが親友よ、昨日妹が、パイロイトの席に対する僕の「権利」を使用したいと書いてきた。遅過ぎなければ、僕は君が報せてくれた申込用紙に署名しようと思う——何故なら受領証を僕はもう全然持っていないから。——ところで妹のこの決心を聞いて僕は快い。僕の友人は皆そこへ出掛けるだろうと思う、ケーゼリッツ氏も。しかし僕自身はワグナーの感情を害してしまつたから、一種の「回復」（全体的認可 *cardiacis ratione*）というのが教会の表現だ）なしに、素朴な祝賀客としてそこに現われるわけには行かない。この回復は無論ワグナー自身によって行なわれる

べきであるのに、その見込はない。そして僕はそれを全然望んでいない。両者の生涯の使命は異なっているのだ。この相異にも拘らず個人的関係が可能であり快適であるとするならば、それはワーグナーがもつとずっと繊細な人間である場合に限られるだろう。親友よ、君はこの点で僕を分っていてくれるね。遂にやってきたあの疎隔はそれなりの利点を持っているのであって、僕はこれを、一つの芸術鑑賞と引換えに、或いは全くの「人の好き」から、むざむざとまた手離す様なことはあるまい。勿論僕は、僕と親しい或いは親しかった凡ての人たちと再会して、ぐらぐらになつた多くの関係を再び固めるための唯一の機会を失うことになる。その中には友ローデがいる、彼は「曙光」を送つてから一言もくれなかった。フォン・マイゼンブルク嬢その他と全く同様に。さて、君が奥さんと一緒にあそこへ出掛けるのなら、僕のためにあれこれの人たちに対してどうか弁護の言葉をのべてくれ給え。僕は本当に、決して「非人間」になんかなくてはいはしない！——

昨日僕は新しい原稿『悦ばしき知識』をケーゼリッツ氏宛にヴェネツィアへ送った。まだ第九と第一〇の章が欠けているが、これ等を作ることは今はもう出来ない——そのためには新鮮な力と深い孤独とが必要だ（レー博士が来週やつてくる）。この二つを与えてくれる一ヶ月をこの夏にどこかの森の中で見出し得るかも知れない。僕はコルシカの森を考えた、しかしまたシュワルツワルト（聖ブラーズィエン?）をも。しかし僕は、僕のあらゆる課題中の最も困難なこの課題を冬まで待たねばならないかも知れない。

ところでケーゼリッツ氏から悪いニュースが来ている。ウィーンの人たちが総譜を彼に返送してきたのだ。彼はその後、ビューローの関心を自分の作に対して呼び起こそうと試みたのだが、同様に失敗した（彼はもうドイツ歌劇音楽と関係する気が全くななくなっている）。——この難局にある僕たちの哀れな友人を元気づけ満足させる効果がありそうなものなら、どんなものでも僕は言い様なく有難く思う。——それにしても彼は、僕以上に哲学者だ。本当に、僕自身の方が彼よりも彼の不成功を辛く思っている！——

わが親友よ、何という苦労と厄介を僕は君にかけてばかりいることか！——今度会ったら、君はクリスト教文献の発生についての君の講義を僕に聴かせてくれるね？——君たちも僕たちの様なこんな「春」にめぐり合っているだろうか？全く「聖なる一月の奇蹟」だノ——

心から君のそして君たちの

フリードリヒ・ニーチエ

ジエーノヴァ、一八八二年一月二十九日

一四六、オーヴェルベックより

パーゼル一八八二年一月三十一日

親友よ、幸いにして僕は同封の申込書式を写し取ったのだった、そしてまだ一部残っている——何故なら印刷されたものは使ってしまったから——、それで君の希望に直ちに添うことが出来る。証書への記入は済ませて置いた——君の受領証の番号は僕のメモの中にあった——君は日付を書いて署名するだけで良い。僕の義妹たちは皆、先週に券を受け取っており、ケーゼリッツも同様だが、それでもまだ遅過ぎることはないと思う、ただし事を遅滞なく進めるのが望ましいだろう。最も簡単なやり方と思われるのは、君が署名した証書を君の妹さんに送り、妹さんが七月二六、二八、三〇の三日の中のどれか一日を決めて、それに応じた券をバイロイトのフォイステルに要求することだ。しかし君が三日の中の一日を僕に指定してよせば、僕が万事をここからやってあげるのは勿論だ。バイロイトへ僕は、寄附が僕の手を通じて行なわれてきたのだから、何れにせよ手紙を書かなければならない、だから出来るだけ早くその点を報せてくれる様お願いする。——君がパルズィファルから離れていることは、残念ながら、生じた事態の不可避免的な結果だ。僕は君の運命の最近の紛糾における結節を成しているワーグナーとのことを大いに遺憾に思っ

ているし、絶えずそう思ってきたのだけれど、それが今解かれれば、新しい関係が君にとって新しい不満の源泉となり、また別の面でも不満の源泉となるであろうと恐れる。お互い同志成るがままに任せておくということにはワグナーは向いている人でないのだからね、そして僕は、益々奇妙な混合物になってゆくバイロイト事業に君が今気持よく出掛け得るとは思わない。僕だって君のためになるからと言ってあそこへ行くのが辛くないわけではない。僕のワグナー家との関係が君の媒介によったものでないとすれば、そしてまたその後を生じた色々のことによつて僕の立場が参加者の誰にも明らかなものとなつていて僕が実際に気楽な *ammonase* あそこにいられるというのではないとすれば、僕は全くその様なことを考えはしないだろう。ワグナー家との個人的付き合いは疎遠であつて、あそこへの出席が僕にも色々と困難である旨を伝えて済ませることが出来るばかりか、単なる儀礼の手紙を送るだけにしておくことも出来るのだ。序でながら、今挙げた観点には全く含まれていないけれど決定的な、或いは如何ともし難い諸事情のためにも、僕が行くかどうかはまだ非常に疑わしい。しかし七月二十八日と三〇日との券がここにはある。——君がケーゼリッツに關して書いて書くことに僕は驚きはしないけれど本当に深い悲しみを覚える。実を言うと僕はそういう結末になりはしないかとの恐れが絶えなかった、この件がケーゼリッツの作品だけの問題なのではなくて目下のところもつと有力な別の幹旋者たちもいるのだということを知った時もだ。現今彼の様に高貴に自らの業績に対して距離を置き、それ等を自分から市場へ持ち出すことをせずに、何らかの商品の場合の様にそれ等を公告して如何なる照会にも応ずる用意をしていることで満足し続けている者は、幸運か辛棒によつてしか救いを期待し得ないのだ。だが僕が本心に心配なのは、ケーゼリッツの境遇が彼に自由を許してくれる期間は何時までだろうかということだ。僕は、先週既に彼に報せておいたところに従つて、今週彼にビゼーのアルルの女を送る。これがカルメンに劣らぬ喜びを彼に与えてくれればと思う、カルメンは僕は二年前にドレーズデンで知った、残念ながらピアノ抜粹曲に過ぎなかったけれど、こんな魅力的音楽がまだ可能であることにびっくり仰天した。その後さらにレーオ・デリブのものを

二、三吟味した。これ等はさして豊かではないが、矢張り、全く驚くべき優雅さを持っている。——僕の講義を印刷用論文に書き変えることをやっている最中でないのなら君に原稿のままで送るのだがね、何故なら君は朗読してくれる人を問もなく傍に持つことになるのだから。序でだが、僕はこの講義において一つの驚くほど単純な思想、つまり、生きる力のあるクリスト教文献が生じたのは既存の文献の諸形式においてのみであるという思想を完成した。しかし全般的に見て、どの人物も例外なしに浮世離れた人物と見られていたかの如くになっている。これらの人物と現世とのつながりを立証しようと企てる者が現われるかも知れないが、それは特に困難な仕事ではなからうし、特に深い意味のあるものを明るみへ出すことにもなるまい。肝腎なのは、これが信じて貰えるかどうかということであろう、しかも僕は、僕の聴講者の中には僕の観点に入り込んだ者が殆ど一人もないのではなからうかと恐れている、否、むしろそうであればよいと思っている。——

フラウと共に心から元気を祈りつつ

君の

○

《この後数年間に亘って、ニーチェの便りの中に痕跡の存在するオーヴェルベックの手紙がまたもやしばしば欠けている。》

一四七、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八二年二月一四日〕

わが親友よ、次々と起こる発作のために、君の手紙に感謝することとバイロイトの証書を君の指示に従って妹へ送ったのを報せることが今まで妨げられた。妹はその後のことを多分やつたろうと思う。——レー博士がきている。彼はヴェローナ経由でやってきた、パーゼルが途中にないのを非常に残念がりながら。彼の僕との交わりほどに親切で

思いやりに満ちている交わりはさらにはない、そして僕たちは度外れなまでに一緒に朗らかであることがしばしばだ。彼は何とジェーノヴァが彼に良い感じを与えるのかにすっかり驚いている。——にも拘らず僕は、絶対的な孤独が僕にとっては気紛れなんかではなくて理性そのものなのであることを再認識している。——彼は三月半ばまで留まる。(僕は最近ロートブレッツ夫人に書き、その前に君の奥さんにも書いた。それ等の手紙は着いたかい?)

君の

F

一四八、ニーチェより

〔一八八二年三月初め、恐らくジェーノヴァから、タイプライタイで〕

わが親友よ、この手紙は同時に指の練習でもある。済まないが我慢してくれ給え、三月半ばに友レーが去る、ローマのフォン・マイゼンブーク嬢を訪ねるためだ。僕自身も同月末までしか留まらない。今でももうここは僕には明るくなり過ぎていて。しかし何処へ?——誰かがそれを僕に言ってくれることが出来ればいいのだが、僕にいつもの五〇〇フランをまた送るといふ面倒をやって貰えるかしら? ケーゼリッツの総譜は今ほローエン男爵の手にある。ゲルスドルフが仲介したのだ。後者の結婚は三月一九日に行なわれる。彼が僕にくれた手紙は非常に率直で勇敢であり新しい調子を帯びている様だった。ロームントは新しい小冊子を仕上げた——「クリスト教と理性」——。これのために装飾画を描いたゲルスドルフは「汝は牧師になるべきじゃったに」と言っている。僕の妹は暫くレー夫人と一緒にいた、そして彼女にすっかり魅せられた。また彼女はフェルスター博士の講演を建築技師会館(ベルリン)で聞いたが、同博士は二回僕について脱線的と言えほどの言葉で述べたとのことだ。彼は南ブラジルへ移住しようとしている、——でなければだ。

心からの友情をもって、なお、レー博士からよろしくとのこと

(1) ゲルスドルフの故郷の上部シュレーズイエン方言で述べられている。

君の F・N

一四九、ニーチエより

〔一八八二年三月、恐らくジェーノヴァから、タイプライターで〕

親友よ、恐らく君の送金がもうこの郵便局についているのだと思う、郵便局が書留便の到着を報せてきたから。今日は君に残りの二五〇フランをケーゼリッツ氏へ送って貰うことの頼みだ——僕からのものであることを書き添えて。春は去った、今は夏の暑さと夏の明るさだ。僕の絶望の時期だ。何処へ？何処へ？何処へ？海岸を離れたくはない。僕は山地を、内陸的なもの一切を恐れる——しかし僕は去らなければならない。何という発作の数々をまた味わったことか！僕が今いつも吐き出す胆汁の非常な量が僕の関心をひく。僕のジェーノヴァ生活についてのベルリン日報の記事は愉快だった——タイプライターまで忘れられてはいなかった。この器械は小犬の様に繊細で、大いに世話がやける——そして若干慰みになる。ところで僕の友人たちは僕のために朗読器械をも発明してくれなければならない、そうでないと僕は退歩の状態に留まることになって、もはや十分に精神的栄養をとれない。或いはむしろ僕は、僕と一緒に仕事をすることが出来るだけの知性と教育のある若者を身近に所有する必要がある。この目的のためには二年間の結婚さえしてもよい——この場合には勿論若干の他の条件が考慮されねばなるまいが。——ローデが手紙をよこした——、彼が僕に関して抱いている観念が正しいとは僕は思わない、それでも僕はこの観念がもつとずっと悪いものでないことに大いに満足している。しかし彼は僕から何かを学ぶことが出来ない——彼は僕の情熱と悩みとに対する共感を持っていないのだ。——ベルリンに僕は一人の奇妙な使徒を持っている。例の B・フェルスター博士が彼の公開講演で僕を非常に力をこめた言葉で聴衆に紹介したのだ。——レーは今はローマだ、四月末に彼はス

イスにいる彼の母親のところへ行く。彼はバーゼルでの一日を非常に楽しみにしていて、前以てよろしくと言っている。

元気なれ、わが親友よ——君に、そして君たちにいつも感謝している

F・N

一五〇、ニーチェより

ケーゼリッツは金を要らないと言っている。——おお、彼は何と強情な！——
〔葉書、消印はジェーノヴァ、八二年三月一七日〕

五〇〇フランは入手した、有難う、わが親友よ。——
取急ぎ君の

F・N

一五一、ニーチェより

〔葉書、消印はメッスリーナ、八二年四月八日〕

かくて、親友よ！理性は勝った、——最近の山地におけるどの夏も僕には実に悪い結果になり、雲に近づくことはいつも僕の状態の悪化と結び付いていたのだが、海岸の一夏がどういう効果を示すかを試すことが残っている。この町を見つめるのは難しかった。結局僕は大胆な一跳びを敢行し、唯一人の船客となつて、まっ直ぐにこのメッスリーナへやつて来て、これは僕の頭が良かったというよりは運が良かったのだと思ひ始めている——何故ならこのメッスリーナは僕に打つてつけないだもの。メッスリーナの人々も僕に愛想よく親切を示してくれるので、僕はもう実に奇妙な数々の随伴的思考に陥っている（例えば、誰かが僕の後を追つてやつてきて、人々を僕のために手なずけてく

れているのではなからうか?という様な)。宛先は、コルシカ、メッスシーナ、局留。君のお便りは僕を考えさせ、そして笑わせた。常に君の、そして君たちの

F・N

一五二、ニーチェより

〔葉書、消印はルツェルン、八二年五月二五日〕

ルツェルンではルーとレーが駅で僕を待っていた。——多分僕は火曜にバーゼル經由でナウムブルクへ向うだろう、レーと一緒に——大急ぎで *prestissimo* ノ————二週間後の火曜か水曜にルーが一日バーゼルへ行く(晩に旅を続ける)。午後に彼女は君と奥さんのところへ行きたいと言っている。差支えないかね?——

心から感謝しつつ。

宛先、ナウムブルク。

◇ニーチェは四月二日にローマのマイゼンブーク嬢を訪ね、その後サロメ母娘及びレーと共にオルタで過ごしてから別れてバーゼルへ行き、五月八日から一三日までオーヴェルベック家に滞在した。それからルツェルンへ出掛けて他の三人と会った。一六日にレーと共に再びバーゼルに立ち寄ってからナウムブルクへ向った(レーは自身の郷里へ)。

一五三、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、八二年五月二三日〕

一言のみだ、わが親友よ!その後調子は良かった。素晴らしい天気だ。ルーに関しては深い沈黙が続けている。それが必要なのだ。——レー夫人のところを訪問することが今や確実に見込まれている。レーの最近の葉書によるとだ。

——僕たちは上等の蜂蜜を食べ、君と君の奥さんについて大いにしゃべっている。誠意をもって感謝している君の

一五四、ニーチェより

〔ナウムブルク、一八八二年夏〕⁽¹⁾

わが親友よ、数日来病氣だ、ひどく苦しい発作があつた。ゆっくり回復している。——ところで君の手紙！——こんな手紙を貰えることは一度しかないものだ、僕は心から君に感謝しており、これを決して忘れることはないだろう。訳の分つていない人たちの眼には実に空想的と映ずるかも知れない僕の企てに対して君と奥さんとの人間的で友人的な、完全で好意的な理解が得られたことを知って僕は幸福だ。《自分の思想世界の後継者である女弟子を見出したものと彼が信じたルー・サロメ嬢とのニーチェの交際に関係している》。実を言えば、僕がこの場合に行動しようとしておりそして行動するであろう如きやり方においてこそ、僕はそもそも完全に僕の思想通りの、否、僕の内奥の思考通りの人間であるのだ。この一致が僕には、僕のジェーノヴァ生活の思ひ出と同様に快いのだ、あの時も僕は自分の思想に遅れをとつてはいなかった。僕の生の沢山の秘密がこの新しい未来の中に包み込まれている、そして行為によってのみ解決され得る課題が今や解決されるべきものとして残っている。——序でながら僕は宿命論的な「信心深さ」を持っている——僕はこれを運命愛 *amor fati* と呼んでいる——それで僕は獅子の口の中へでもとび込んで行くかも知れない、ましてや——

夏についてはまだ一切が極めて不確かだ。

ここでは沈黙また沈黙だ。妹に関して言えば、僕は彼女を局外に置くことをすっかり決心している。彼女は紛糾させるのみだろう（先ず第一に自分自身を）。

ロームントが来ていた。元氣だ、そして理性の面で若干増加した。

君と奥さんに心から愛着しつつ。

F・N

(1) プファイファアの推定によれば「多分六月七日」のもの。「ニーチェ、レー、サロメ。三者の交わりの証拠文書」(インゼル社、一九七〇年刊) 一三五頁参照。

一五五、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、八二年六月二十四日〕

親友よ、明日僕はナウムブルクを去る。僕の宛先は、ドルンブルク付近のタウテンブルク村(テューリンゲン)。

——君にはちゃんと分っているね⁽¹⁾——トイブナーは既に「悦ばしき知識」を印刷中だ。ケーゼリッツが校正を手伝ってくれる。原稿を印刷用に整えることは辛かった、長年に亘ってこれが最後であらんことを——ルー嬢はシュテ IPP のレー夫人のところにおいて、僕たち皆と同様に上機嫌だ。七月二十四日に彼女はバイロイトに現われるだろう。ウィーンへの移住は九月にはもう行なわれるだろう。ルー嬢の住居について君に何か当てがあるかい?——金は今は要らない。君がドイツへ行くとしても、それにはまだ間があらう。——ロームントは落着いて、元気で、計画で一杯になっていた、その上、僕が思っていたよりもずっと理性的で気持が良かった。——奥さんに心からよろしく!

F・N

(1) ニーチェはテューリンゲンの森でサロメ嬢と一緒に過ごす計画をオーヴェルベックに既に話していたものと思われる。サロメ嬢には五月二八日の手紙でその計画を持ち出し、レーにも五月二九日の手紙で書いてある。

一五六、ニーチェより

〔葉書、消印はドルンブルク、八二年七月一八日〕

わが親友よ、君の、そして君たちの骨折りに心から感謝する。まだルーからは何の返事もない。——齒医者のためには、君が書いてくれた様に処理してくれ給え。——五〇〇フランをまだドイツの金に替えていない場合には、どうか二〇フランを金貨で受け取ってくれ給え。——ヘレーネ・トルシュコヴィツ嬢の宛先を知りたいのだがね、そしてまた編集者クルティの宛先も。——印刷はゆつくりと進行中だ、僕は八枚目の校正をやっている。——健康はまず良好だ、しかし時折突発する。——君たちに感謝しつつ

F・N

一五七、ニーチェより

〔葉書、消印はドルンブルク、八二年八月二日〕

わが親友よ、「悦ばしき知識」はドレースデンへ送る様に指令した、直きに君のところに着くだろう。一緒に送るもう一冊の方をミュンヒェンのロートプレッツ夫人へ送ってくれないか、住所が分らないのだ。——この書は如何なる点でもドイツの趣味に反している、そして現代にも。そして僕自身はそれ以上にもつとだ。ジェーノヴァを去つて以来、人間とのどの接触もが僕にこのことを教えた。——今度の日曜にナウムブルクへ移る。——君の奥さんが聖ナルー一月 Sanctus Januarius についてどうお考えかを聞かせて欲しいと思う。君たちに心から愛着しつつ——

ジェーノヴァ人

ルーと僕の妹が心からよろしくとのこと。

◆サロメ嬢は八月七日にタウテンブルクへやってきて（ニーチェの妹と一緒に）、二六日に去った。ニーチェはその翌日に去り、妹のみが残った。

一五八、ニーチェより

住所、ライプツィヒ、アウエン街、二六号三階（一八八二年九月）

わが親友よ、かくて僕はまたもや、昔ながらの本の町ライプツィヒにいる。再び遠くへ行く前に若干の本を知っておくためだ。ドイツの冬の陣は恐らく何にもならないだろう、如何なる意味でも僕には明るい天候が必要だ。確かにドイツのこの曇り空は性格を持っている、パルズィファル音楽が性格を持っているのと大体同様だと思われる——しかし悪い性格だ。僕の前に秘密ノ結婚 *matrimonio segreto* 《ベーターガストの作。一五九頁以下参照》の第一幕が置かれている——黄金の様な、きらめいている、良い、非常に良い音楽だ！

タウテンブルクの数週は僕に快かった、特に最後の頃が。そして大体において僕は回復を語る権利がある、僕の健康の不安定な均衡をしばしば思い出させられるにしてもだ。それにしても頭上に澄んだ空が欲しい！そうでない僕には余りにも多くの時と力を失ってしまう！

聖ナル一月を読んだなら、僕が一つの回帰線を越えたことに気付いたと思う。一切が新しく僕の前にある、そして僕が僕の今後の生涯の課題の恐るべき顔をも見得る時は遠くはないだろう。この長くて豊かだった夏は僕にとって一種の試験期間だった。僕は非常な勇氣と誇りをもってこの夏に別れを告げた、何故なら僕はこの期間中は少なくとも、意欲と成就との間の平生実に醜い割目が橋渡しされていると感じていたからだ。僕の人間性に対して苛酷な諸要求が行なわれたが、如何に困難な場合にも僕はみずからの分に満足する様になった。既往と将来との間のこの中間状態の全体を僕は「生ノ半バニ in media vita」と呼ぶ。長年を経た後にまたもや僕を訪れた音楽のデーモンは、音によってもそれを語ることを僕に強いた。

ところで僕がこの夏に行なった最も有益なことはルーとの会話だった。僕たちの知性と趣味は根底において同類だ——しかも他方において対立点が実に多いので、僕たちはお互い同志、実に啓発的な觀察の客体であり主体であるの

だ。自分の経験からかくも多くの客観的認識を取り出し得る人間、学んだ一切からかくも多くのものを引き出すことを心得ている人間を僕は今まで知らなかった。昨日レーが僕に「ルーはタウテンブルクで断然、数インチ成長した」と書いてきた——ところで、僕の方もそうかも知れない。僕たちの間に存在する様な哲学的率直さが今までに存在したことがあったかどうかを僕は知りたいと思う。ルーは今に完全に本と仕事の中にもぐり込んでいる。彼女が今までに僕に示した最大の好意は、レーに説いて僕の主要思想の一つに基づいて彼の書を書き改める様にさせたことだ。——彼女の健康は六、七年しか持たない、のではないかと懸念される。

タウテンブルクはルーに一つの目標を与えた。——彼女は僕に、感動的な詩「生への祈り」を残してくれた。

残念なことに僕の妹がルーの不倶戴天の敵になってしまった、彼女は最初から最後まで道徳的な怒りで一杯だった、そして今は、僕の哲学の何たるかが分つたと主張している。彼女は母にこう書いた、「私はタウテンブルクで兄さんの哲学が生き始めるのを見て驚きました、つまり兄さんは悪を愛しているのです、けれど私は善を愛しています。私がちゃんとしたカトリック教徒なら修道院に入って、このことから生ずる一切の禍の償いをするところです」と。要するに、僕はナウムブルクの「美德」を敵に回したので、僕はトランクを荷造りさせて朝早くライプツィヒへと発った。妹として母も遂に逆上してひどい言葉を吐いたので、僕はトランクを荷造りさせて朝早くライプツィヒへと発った。妹（彼女は僕がナウムブルクにいる限りそこへ行かないと言い張った、そしてまだタウテンブルクにいる）はそれに対して皮肉な引用をしている、「かくてツァラトゥストラの没落は始まった」と。——事実は、発端の開始なのだ。——この手紙は君と奥さんとの秘密にしてくれ給え、僕を人間嫌いとは思ひ給うな。心の底から

君のF・N

「欄外に」 ロートプレッツ夫人とその御一家に心からよろしく、君にまだ僕は君の親切な手紙のお礼を言っていないかった。

(1) ニーチェは後出のルーの詩「生への祈り」を作曲して九月一日にペーター・ガストに送っていた。

一五九、ニーチェより

〔ライプツィヒ、一八八二年一〇月〕⁽¹⁾

わが親友よ、調子はまあまあだ、あれこれの事柄が決まるのを待つために手紙を書かなかった、そして今日書くのは君にこのことを言うために過ぎない。何故ならまだ何一つ決まっていけないからだ。僕の旅行と冬の計画についてさえまだなのだ。パリは依然として前景に出ているのだが、僕の状態がこの北国の空の影響下で悪化したことは疑いない。このライプツィヒの秋ほどに憂鬱な時を僕が過ごしたことは決してなかったのではなからうか——上機嫌でいられるだけの理由が僕の周囲にはあるのだけれど。要するに、僕が心の中でバーゼルを通ってまた海の方へ旅した日が幾日もあったのだ。僕はパリの喧騒を若干恐れている、そしてそこに十分な明るい空があるかどうかを知りたいと思う。他方、新たなジェーノヴァの孤独の中にも幾多の危険があることだろう。——実を言うと、僕は君と奥さんとに今年の諸経験について長い報告をしたくてたまらなかったのだ。話すべきことは実に多くあり、書くべきことは少ない。

ヤンセンの書は大感謝だ、これは特に、彼の見解とプロテスタントの見解との相違の凡てを精密に述べている（全体の趣旨はドイツのプロテスタンティズムの——何れにせよプロテスタント的「歴史記述」の敗北ということだ）。主要点において僕自身が学び直さねばならない点は多くなかった。ルネッサンスは依然僕にとってはこの十世紀の間の頂点だ。そしてその後を生じた事柄は、あの時期の「個人主義」に対するあらゆる種類の畜群本能の大きな反動なのだ。

ルーとレーは数日前に出発した、先ずレーのお母さんとベルリンで会うためだ、そこからパリへ出掛けるのだ。ル

ーの健康は悲しむべき状態だ、今では僕は、彼女の余命が、この春に僕の考えたよりもずっと短いと思っている。僕たちは可成りに不安を持っている。レーはこのことにおける彼の任務にはおあつらえ向きだ。僕個人にとってルーは全くの儲け物だ、彼女は僕の期待の凡てを満たしてくれた——二人の人間が僕たち以上に同類であり得るということにはさらにあることではない。

ケーゼリッツ（というよりはむしろ「ペーター・ガスト」氏）に関して言えば、今年の僕の第二の奇蹟がここにある。ルーが僕の哲学の従来殆ど隠されていた部分のために、他の何びとよりも準備出来ているとすれば、ケーゼリッツは僕の新しい実践と再生との全体を音によつて是認してくれるものだ——全く利己的な言い方をすればね。ここにあるのは新しいモーツアルトだ——僕はもはやこれ以外の感じを持っていない。美しさ、誠実さ、明朗さ、充実、独創の充満、そして対位法を駆使する軽やかさ——これ等がこんな一緒にいるのを僕はまだ見たことがない、僕はもはや他の音楽を全く聞きたくない。ワーグナーの類のものが今は僕の耳に何と貧弱に、技巧的に、そして芝居的に響くことか！——戯れ、企み、仇うちがここで上演されるかどうか？僕はそう思っているが、まだ分らない。——

同封するこの写真¹は君の誕生日の食卓に置いて欲しい（写真は見事だ）。

ロートプレッツ夫人は僕の最近著を受け取ったろうか？僕は夫人の正確な住所を忘れた。

心から君に良い一年を願いつつ、君の友

ニーチェ

(1) プファイファーによれば、十一月第二週。

(2) 「中世以来のドイツ民族史」フライブルク、一八七七——九四。ニーチェは七九年一〇月五日のガスト宛の手紙において同書第二卷（七九年刊）を所有していることを述べているから、これは第三卷であろう。同書については「道徳の系譜」第三論文一九節を参

照のこと。

一六〇、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八二年二月三日〕

親友よ、その後良くなかった。ゴットハルトの旅は氷の様に冷たく、暖房なし。ジェーノヴァの僕の住居は既に借りられていた、ジェーノヴァそのものは氷の様に冷たくて雨降り、凡てが僕にはうまくなかった。遂に僕はポルト・フィーノへ向って出発し、サンタ・マルゲリータに留まった。翌日に（現在まで）頭痛の激しい発作、嘔吐その他を伴って。僕の部屋は氷の様に冷たい、旅の印象の凡てと同様に。けれど僕は留まっている以外に良い策が見当らない。「傷心」がいつも僕に付きまとっている——という文句が何処かにあった（シェイクスピアだったか？）。今後のものはサンタ・マルゲリータ・リグーレ局留で送ってくれる様お願いする。

君のF・N

君たちのところの滞在はオアシスだった。——
今日は、僕は病んでいる。

◆ニーチェは二月一五日にオーヴェルベックを訪ね（一六日がオーヴェルベックの誕生日）、一八日にジェーノヴァへ向ったのだ。た。

一六一、ニーチェより

（サンタ・マルゲリータ・リグーレ）〔一八八二年二月初め〕

親友よ、色々のお報せを本当に有難う／若干良くなっている、或いはむしろ、きつと良くなるだろう／多くの発作

を越えてきた。笑い出した位だ、僕は三年続けて殆ど同じ時期に僕の「一切の終り」を信じた／それでも、僕は頑固だ。そうでないとしても僕は、生をもう少々眺めているだけの自分に対する苛酷さをまだ持ち合わせている、生が僕を如何に虐待しようともだ。

しかしながら来年は自分の未来に関して何かを工夫し、自分を自分自身に対してもう少し安全にしてやらねばならない。如何に僕が「理性」を持っているにしても僕は依然として一個の情熱的で突発的な存在なのだ、孤独は長ければ長いほど危険なものになる。――

僕は今年は本当の欲求をもって「人間」へと帰って行つた――人々が僕にきつと若干の愛情と尊敬を示してくれるだろうと考えていた。僕が体験したのは軽蔑、嫌疑、そして僕の能力と意欲に関しては皮肉な無関心だった。幾つかの意地悪な偶然によって僕はこれ等凡てを残忍極まる形で体験した。――客観的に見れば、それは極めて面白いものであった。――

今は僕は全く孤独に自分の課題を前にして立っている、そしてこれの解決の後に何が僕を待っているかをも知っている。堪え難いものに対しての防壁が僕には必要だ。――

ところでね、僕には一人の信奉者がいる――即ちハンス・フォン・ビューロー（「僕に対する献身的共感」）。H・フォン・シュタイン博士の手紙も僕を驚かせた――彼は「悦ばしき知識」によって全く啞然となって僕に「畏敬に満ちた挨拶」を送ってきた。

ここで僕に生じてきたのは、聖ナル一月についての君の奥さんの考えが矢張り聞きたいという気持だ。

ビゼーは大きな喜びだった、僕は自分の周囲にさまざまな形態のビゼー的なものを所有したいものだと思う。僕には牧歌が必要だ――健康のために。心から元気を祈りつつ、君の友

(サンタ・マルゲリータ・リグーレ、居留。)

一六二、オーヴェルベックより

バーゼル、八二年二月三日

親友よ、奇妙な運命によつて君は今、君が今回の避難所として報せてくれたリグーリアの巢へ追い払われ——僕の地図には少なくとも載っていない、しかしポルトフィーノは確かにある——そしてそこで今や君は、他所の世界で目下祝われている祝祭の日を過ごすと共にその他さまざまのものを即興で作らざるを得ないのだね。僕たちにとつてこれ等の日は特別の関心をもつて君を思い出す機会でもある。僕たちは、年の暮に當つて君のために良かれとの願いを幾つも持っている中でも、今回は運命の恵みに対して、何よりも先ず来年は君の未来が明るく晴れる様に計らつてくれることを願っている。とは言つても、これは何も、君の現在に対して既に晴れやかなものを与えてくれては困るとか、君の前で出来るだけ早くビゼー風 *modo Bizetico* の何かを演奏することをこの世に許してはならないとかいう意味ではない。君がこの秋に再び自身へと投げ戻された事情の下にあっては、君が今切り抜けてきた数週は内容の重いものであつて、これを極度の不安なしに眺め得るのは、君が道德的事象の岸边における如何なる遍歴者 *roûteur* であるかを知っている者のみだ。僕が心から嬉しく思うのは、君の今度の手紙が実に落着いている君を示しており、外部から君に与えられた若干の喜ばしい生ける印についても述べ得ていることだ。H・フォン・シュタインが生涯を賭しての煮物を行なっているらしい魔女用の鍋から今後何が出てくるのかを誰が知つていようか？その沈黙が君をいぶかせていたローデから僕は約三週間前に、彼がライプツィヒの君宛に詳しい手紙を書いたところだということを報された。その手紙が君に届いていればいいが。ケーゼリッツからは最近アンナベルクからの手紙を受けた、これによればミュンヘン訪問は中止された様に見受けられるが、幸いにしてバーゼル訪問がではなかった、こ

この僕たちは依然として彼が年の初めに来るものと期待することを許されている。——一昨日僕はまた君のための五〇〇フランを受け取った。一〇〇フラン——正確には九二——がその中からリットマンのために差し引かれる、その余については直ぐに君の指示が得られると思う。君の新しいバーゼル債券が今僕のところにある、五〇〇フランの二枚（一八八〇年の都市バーゼルの国債二八〇三及び四番）で、利子支払期日は九月三二日（四〇フラン）だ。僕たちのところは万事が静かに進行してきた。僕が講義でまた恐ろしく忙しいものだから、僕たちは依然としてまだウェーゲレのダンテを読み合っている。僕が驚き、且つ、独特の流儀で優れているこの知性の構造の特徴を良く示していると思ったのは——僕はダンテについて言っているのだ——、この男がイタリアの民族語——由来と構成——についてさえ、——この民族語を歴史的存在たらしめたのは彼が最初であつたのに、全く空想的な間違つた見解を持っていたということだ。フラウと初めて二人だけで祝うクリスマスに当って彼女は、祝いの人数に比すれば巨大と言えるほどの準備をしている、それで彼女が今書かねばならないあれこれの手紙は殆ど手をつけられずにいる。そんな事情のため彼女は、聖一月について何か書くことを今は保留しても今回は許してくれる様にと君に乞うている。——このことに関しては、ゾーツィン——外科教授——がヴェルツブルク大学との激戦の後にここに留まっていること、ハイネが春にゲッティンゲンへ行くこと、カフタンが同じ時期に恐らくベルリンへ行くことだけを報せておこう。僕たちは留まり続け、そして近日中に君からも便りがまたくるだろうと待ち焦がれている。誠実をもって常に君のものなる

F・O

一六三、ニーチェより

〔一八八二年二月二七日受領、消印はラバロ、二月二十五日〕

親友よ、ひょっとすると君は僕のこの前の手紙を全く受け取らなかったのではなからうか？——この最近の一片の

生は、僕が今までにかじった中でも最も堅いものだった、そして僕がそのために窒息するという可能性が依然としてある。僕は狂気に悩む如くに、この夏の侮辱的で苦痛に満ちた数々の思い出《ルー・サロメの件における幻滅》に悩んできた——バーゼルで、そして僕のこの前の手紙で暗示した事柄は最も本質的な点には依然触れていなかった。相反する激情同志の葛藤がその中にはあるのであって、僕の手には負えないのだ。つまり、僕は僕の自己克服のあらゆる筋を緊張させている——しかし余りにも長く孤独の中に生きてきて「自分の脂肪」を食い尽くしてきたものだから、今は自分の激情の車で引き裂かれることが他の人以上なのだ。眠ることが出来さえすればいいのだが——しかし僕の睡眠剤をどんなに沢山飲んでも、僕の六乃至八時間の行軍と全く同様に効かない。

この——汚物をも黄金にする錬金術師の手品を考え出さなければ、僕はおしまいだ。——僕にとっては「あらゆる体験が有益で、あらゆる日日が神聖で、あらゆる人間が神的で」あるのだということを実証すべきこの上なく素晴らしい機会を僕は今与えられているのだ!!!

あらゆる人間が神的。——

僕の邪推の念が今は非常に大きい、僕は僕が耳にする一切から僕に対する輕蔑を感じ取る。——例えば、つい最近ローデの或る手紙からだ。以前に友情関係を結んだという偶然がなければ彼が今卑劣極まるやり方で僕と僕の目標とを酷評するであろうということを僕は断言したい。

ところで昨日僕は母とも文通を断ち切った、もう我慢出来なかったのだ、そしてとつくにもう我慢出来なくなっていたとしたらもっと良かったのと思う。その間に僕の家族の敵意ある判断がどの位遠くにまで広がって、そして僕の評判を駄目になっていることか——ところで、僕はこの不確かさに悩むよりもそれを知りたいという気持の方が依然として強い。——

ルーに対する僕の関係は実に苦しい最後の様相を呈している、僕は今少なくともそう思っている。何時か、——

若し何時かがあれば、僕はこのことについても一言述べざる積りだ。親友よ、同情は一種の地獄だ——たとえばショーペンハウアーの信奉者たちが何と言おうと。

僕は君に、「僕はどうしたらいいのだろうか？」と問いはしない。バーゼルに小部屋を借りて、君たちを時々訪ねたり講義を聴いたりしようと幾度か考えた。その反対のことも幾度か考えた、つまり僕の孤独と断念とをぎりぎりの点まで押し進めること、そして——

さて、それはなる様になるがいい！親友よ、君とそして尊敬すべき賢明な奥さんと——君たちは僕にとってまだ残されている殆ど最後の、一フィート幅の確かな拠りどころなのだ。不思議だ！

君たちが元気であってくれる様！

君の F・N

(1) この原注は適当でない。夏にはレー及びルーとニーチェとの間は概して良好であった。ここでニーチェが指しているのは家族との争いのことである。それはこの手紙からも分るが、一五八番、一七一番、及び一七六番の手紙をも参照のこと。

一六四、オーヴェルベックより

〔断片であって、書かれたのは恐らく一八八二年二月二十七日か二十八日。ニーチェは大晦日以前にこれを受け取り、大晦日には一通の手紙に対する礼を述べている。〕

……報告がなされたのだろう。しかし僕はそう考えるべきこれ以外の根拠を全然持っていない。ブルクハルトから僕はつい二週間前に全く昔と変らぬ調子で君のことを尋ねられた。他に僕に疑いを起こさせる様な発言は全くなかった。何れにせよこの事柄には大して重きを置き給うな。君の運命を最近暗くした全体的事情が終ったという報せは、その終りが君にとって如何に辛いものであっても、良い報せだ。凡ての関係者の中で君だけがこのことの犠牲である

かも知れないというのが、全然信用する気になれない最初の君の報告を聞いた時からの僕の懸念だった。そしてこの種のこと破れる場合には、そのこと自体が失われるばかりでなく、それ以前に持っていたものやそれ以外に持っているものもあれこれと失われるのが常だ。この点では、既に生じた事柄の中に僕の知らないものも色々あろうと推測する。この問題が片づいたことは何れにせよそれ等から自由になるための第一歩だ。難しい残余部分も早くうまく行くといい。どうか元氣を取り戻してくれ給え、君は君の事業の様な素晴らしい事業を、あんなにも深く刺激した後で見捨てるわけには行かない。

しかし今僕たちの、フラウと僕との切実な唯一の忠告はこういうことだ。ひとりぼっちでいてはいけない、そして君が最近体験したものを少なくとも目下は一般的経験とさえ考えて無視することにし給え、少なくともそうなる様に出来るだけの努力をし給え、そしてこの点で君が色々決心したら、それを報せてくれ給え。何れにせよ早速手紙をくれ給え。変りなく君のものなる

F・オーヴェルベック

(1) この点線は訳者が付けたものである。つまり、この手紙は最初の部分が欠けているのである。

一六五、ニーチェより

〔一八八二年大晦日、恐らくサンタ・マルゲリータ・リグーレから〕

親友よ、君の二通の手紙には心の底から感謝する。そして今日君は、僕がその後もまだ賢明になっていないことを聞いても不思議とは思わないだろう。僕がこの十年間苦痛と諦念とを克服するのに必要としてきた巨大な緊張のために、この様な状態の時にはひどいことになる。僕はその緊張のために余りにも機械になり過ぎたのだ、それでこんなに激しい動揺の際にはぜんまいがとゞ危険が少なくないのだ。

僕は三回シェーノヴァへ行つたが、僕が今回必要としている部屋、つまりストーヴ付きの部屋が見付からなかった。寒いのだ、僕はライプツィヒで既に火に親しんだ——そしてまた、僕は余り熱を失うわけには行かない。シェーノヴァにはストーヴがない。一番寒い月が目前に迫っている。

結局どうにもならない、僕はここに留まらねばならない。僕の頭には、海の近いことが一種の緩和を与えてくれる——これは過少評価すべきでない、何しろ僕は、お分りと思うが、今は再び肉体的にも非常に苦しんでいるのだから。

僕は今や精神でもなく肉体でもなく、或る第三のものだ。僕は絶えず全体に悩み、全体の中で悩んでいる。——さて、どうなるのだろうか？僕の自己超克は實際僕の最も強い力だ、僕は最近自分の生涯を考えてみて、自分が今までそれ以外のことは全く何にもやってこなかったということに気付いた。僕の「業績」(そして特に一八七六年以降のもの)さえ、禁欲の視点から見られるべきものだ。この人間の場合には、禁欲が他の人間の場合とは少々異なって見えることは勿論だ。(聖ナル一月も一禁欲者の著なのです——わが親愛なるオーヴェルベック教授夫人よ！)

心から元気を祈りつつ

君のF・N

そして新しい年を祝しつつ——古い年については何も言わないことにして！一八八二年大晦日(この紀元年数は僕がぞっとさせる)。

一六六、オーヴェルベックより

バーゼル、八三年一月一五日

親友よ、僕は君に、僕が与えられたばかりの大きな喜びを早速伝えなければならない、ところでこの嬉しいことが

なかったとしたら僕は君にもっと早く手紙を書いていたことだろう。何故なら僕が君の便りを非常に欲しがっていることは君には言う必要がないことなのだからね。しかしケーゼリッツが、この優れた人物が、ここに来ていたのだ、それでこんなに長く僕は他のことばかりでなくこの手紙を書くことも妨げられていたのだ。彼は金曜に着いて今日——月曜——まで滞在し、君が十一月一日に発ったのと同じ汽車で発って行った。しかし彼の滞在については君は既に彼自身から報されていると思う、彼が君に土曜に手紙を書いていたから。彼がドイツで結局獲得したものと獲得しなかったものについても彼は君に報せたことだろう。獲得したものは、ケーゼリッツがこの遠征で学んだものの他に、色々の結び付きだ、これは僕には、少なくともライブツィヒのリーダーやドレースデンのシュホといった人々に關しては、将来のために価値がないことはない様に思われる。しかしそれが差し当りそれ以上のものでないことは僕には必ずしも驚くべきこととは思われない、僕は幾つもの総譜を見たばかりか、複雑なオーケストラの付いている戯れ、企み、仇うちの総譜をも見たのだがね。しかしケーゼリッツの凡てをピアノで聞いた限りにおいて僕たちは、これ等の極めて豊かで愛らしく喜ばしい音楽が全く上演されることにならないとすれば、自から慰める術を見出すことは容易でなからう〔欄外注。ケーゼリッツは簡単に編曲した牧歌的音楽をもくろんでいて、それをリーダーに送る積りでいる、そして僕はそうすることを強くすすめた〕。結婚 Matrimonio の序曲にだけは僕は趣味を感じるに到り得なかった、そして戯れ、企み、仇うちの序曲はピアノでは不可能なために聞けなかった。その他は実に楽しく傾聴し、恍惚となったこともしばしばだった。工夫におけるあの様な豊かさの故に、——この場合僕は、楽器編成法などに關係して全く僕には述べる資格のない事柄には触れない、——さらに僕がまたしてもケーゼリッツの人柄とその非常な有能さとに關して得た印象の故に、僕は彼に、彼の未来がまだ不明瞭であるにも拘らず期待と信頼で一杯になりながら今日は左様なら言ったのだ。それにしても君のことを考えれば考えるほど、こんなにも長く君から何の報せもないことが僕の心にのしかかった。そしてケーゼリッツが報せてくれたことはもっと古いものだった。年末の僕

の手紙を受けた後の君のこの前の手紙も君の現在の様子についての望ましい安堵を全然もたらしてはくれなかった、そして僕は特にその手紙から、君がジェーノヴァで適当な住居を見付けることを目下断念していることを見て取って、或いは少なくとも見て取れる様に思つて、心配になった。君が今「肉体的にも非常に苦しんでいる」ことは無論最近数週間の僕たちの絶えざる心配の種だった、そしてその間に僕がしばしば考えたのは、最近数年の大きな成果、君の健康の回復までもそのために再び失われるのではなからうかということだった。去年の末の或る晩に僕たちはい一度君の聖ナル一月と一緒に読んだ。無論僕たちはそれを必ずしも一禁欲者の書と考へて読んだのではない、そして今でも、その中にあるその種のものがその中で最も良いものだとは考へることが出来ない。これ等の見事な頁を書いている時の氣分を君に与えたのは何と言つても自己超克のみではない、そして君が自己超克なしにでもその氣分への通路を再び見出すことが不可能でないことは確かだ。しかし、この年が君にとって、始まつた時とは何と違つた工合に終つたかを考へると僕たちは勿論辛かつた、そして僕たちは、今始まつた歩みが逆のものになる様にと切に願うと共に、この悪い始まりをその前兆と見なす。どうか出来るだけ早く君のことをまた報せてくれ給え。お分りの様に年末以来僕の手許には君の自由になる四〇〇フランがある。リットマンには九五（九二フランではない、僕は最近そう書いた様に思うが）。その他に一四フランが目下君の金庫の中にある。フラウが心からよろしくとのこと、いつも君のものなる

F・オーヴェルベック

一六七、ニーチェより

〔一八八三年一月二日受領。消印はラパロ〕

親友よ、調子は全く良くない、このことを言わぬに越したことはないのだが。二月初めに僕はジェーノヴァへ移る

積りだ——この前の冬に住んだのと同じ家に住むことになる。ストーヴはなしということになる——ここでもなしでいる。この冬は今まで無かったほど僕は凍えた、食事もこんなに悪かったことはない。とにかく健康は大いに逆行している。

僕は、あらゆる隠遁者にとって人間憎悪が如何なる価値を持っていたかがやっと分った。残念ながら僕の性質は逆だ。また僕は、僕が自分自身に対する岩の様に固い信念を持っていればいいのだがと思う、しかし僕はそういう工合には益々もって作られていない。そうあり得るには余りにも僕は病氣なのだ、そして天氣が変り空が曇るたびに僕の中には大きな不安が生ずる。この前の夏のドイツの天氣とこの冬のこの天氣は、僕に起こり得る肉体的災難の中で最も悪いものだ。実のところ「悦ばしき知識」は、一ヶ月間澄んだ空を頭上に持っていたことを嬉しがる誇大なやり方でしかない。つまり悩んでいる者は非常につましくそして極端に感謝に満ちた氣持になるものだ——昨年は別の事柄に関しても僕は余りにもその様であつた。

その悪しき一年の「道徳的な」最後の結果はこうだ、つまり僕は同じ毒を百回も、色々な分量で飲まされてきた、無礼な無関心から深い侮蔑に到るまでの「輕視」という毒を。そのために僕には隣中毒の時の様な状態が生じた、つまり絶えざる嘔吐、頭痛、不眠等。だから僕は長いこと外部については何にも体験しなかつた、ところが昨年は実に多くを、遺憾ながら常に同一のものを体験したのだ。それで僕はそれを逃れるのが実に難しい。しかし死ノ恩恵 *beneficium mortis* を自分に許しはしない——僕はまだ何かを自分に求めている、そして悪い天氣や悪い評判によってそれを妨げられたりはしない。

ドイツは今僕にとって不快な地帯だ、そこに住んでいて僕が尊重している種類の人たちこそが僕を極度に嫌っているのだ。そしてドイツ人たちは嫌惡の仕方が実に拙劣であつて、いつも直ぐに粗野——無礼になる。僕は学生だつた時の方が昨年よりも尊敬のこもつた扱いを受けた。

そういうわけで、僕には入口も出口も全く分らない。僕をスペインへ連れて行ってくれる人があればなあノヨロップパとしては澄んだ空を得られる可能性がそこには一番ある。(僕はペルテス地理学雑誌の或る論文によって地中海氣候については非常に良く通じているのだ。)

ロートブレツツ夫人は新年に当って実に親切な手紙で僕を喜ばせて下さった。彼女は僕たち皆が夏に一緒になる可能性を提唱しておられる——チロルか南バイエルンで。しかし上述の如く僕はドイツを恐れている。

僕は雄大なアルプスの荒地の様な場所に若干の期待を持っている、僕は勇氣を出さなければならない。

そして益々僕に分ってくるのは、僕がもう人間の間には適合しないということだ——僕は馬鹿なことばかりやっている(僕は、内緒で言えば、1、余りにも率直であり過ぎ、そして、2、極端なまでに人好しだ、それで一切の不正がいつも僕の上に載ったままになっている——このことは、長いうちには非常に悪い結果をもたらす)。

では左様なら、わが親友よ、僕は僕に敵対的でない人々の凡てに対して好意的であり公正である様に努める。奥さんに心からよろしく、そして君たちお二人の幸いを切望する。

F・N

〔欄外に〕ケーゼリッツの諸体験は僕のものに似ている点が幾つもある。しかし彼は僕よりも優位にある。つまり彼は完全に健康なのだ。

一六八、オーヴェルベックより

バーゼル、八三年一月二八日

親友よ、僕が、そこから何らかの報せがありそうなものだとしれただけでたまらなくなりが待っていたヴェネツィアを經由して、今月十日のものだという君の消息についての報せをやっと受け取ったとたんに、君の、二〇日に

ラパロで出した手紙も着いた。君は今楽しい手紙を書いてくれない、それを書くことが全然出来ないのだし僕もそれを期待することが出来ない。それでも、或る非常に良いことが君の今度の手紙には書かれていたのでこの手紙を読んだ時にはやっと安心の感じが強まった。君がまだ何かを君自身に求めており悪天候や悪評によって妨げられはしないという決然たる言葉のことを僕は言っているのだ、その「悪評」なるもの以上にひどく君を妨げている障害がないのなら本当に幸いなのだが、僕は、君がこの夏もドイツで経験したという「軽視」なるものを信じない。言うを許されるならば目下の君の如き通世の中にあつてその異端ぶりが知れ渡っている君の如き異端者があそこで如何なる扱いを覚悟せねばならぬかを僕は十分にはっきりと感ずることが出来るし、君から身を守るときに無作法にも君にとつて工合の悪いあらゆるやり方が用いられたことが往々あつたことも決して疑いはしない。僕はまた、君がその様な扱いに再び身をさらすことを君に求める積りもない、しかし君の考えの中でその様な扱いを軽視と考へて意氣消沈するには及ばないのだ。僕はその様な軽視にはまだ全然氣付いていないことを君に断言する、そして、僕自身の評判が香ばしいものではなくて君に関すること僕の耳には殆ど入らないのだという異議があろうとも、上述のことを僕は証し得るだろう。例えばここで僕に君のことを尋ねる無論数少ない人々の誰の場合にも、関心をもつて尋ねるその口調のなかにほんの少しの変化も認められなかったことは確かなのだ、しかも僕はしっかりと耳を傾けて聴いているのだ。そして君の諸著に関する公然たる発言からも、僕の念頭に浮かぶものである限りは、不満が隠されていない場合であっても、現われているものは低い評価どころではないのであつて、軽視でないことは言わずもなだ。国際月刊誌十一月号の小論文のことは、ケーゼリッツから報されたところによれば、もう君は知っている。これは、僕が君に関して読んだこの種のものの中で最も嬉しかったものの一つだ。著者は年間全体の内容目録において「エルンスト・ワグナー」であることが明らかにされている。ところでもたリンダウの現代の本年度第三号に僕は最近「H・D」と署名された短い批評文を見付けている、これは友人のものでないことは確かだが、非常に好ましいものであつて、前

記の著者に対する関心を呼び起こすのに実に役立つものだ、しかもこの種の雑誌が取巻き連中に対して要求するのを常としている関心よりは高尚な関心をだ。「軽視」よりもずっとずっとひどく君を脅かしている様に思われるのは君の健康だ、それだから、それがまた「大いに逆行」しているという報せは君が今僕に報せ得るものの中で最も悲しい報せなのだ。僕は君に切に頼む、健康を大事にし、故なく凍えたりせず、君を栄養不良にしないでくれ給え。一八七九年春に君の様な状態にあり、その三年後に昨年春の君の様な風に見えるまでに回復し得た人間は、健康の宝庫をまだ体内に所有しているのだ。目下君は何よりも先ずこの点において、君の運命のハンドルを握っているのだ。君がジエーノヴァでまたもストーヴなしだということは僕を非常に悲しくする、何故なら今年の冬は南方でもきびしいからだからね。しかしそこでは最悪時期は多分去っているだろう。君がまた君の金を意のままに使うことをも僕は待ちこがれている、そして君が実に僅かしか使わないことを全然嬉しいとは思わない。その地で本当に必要なものを欠かせてはいけないよ、そして健康以外のものを君の眼前に置き給うな。——夏には山地で会うという考えを堅持するとうよう。「荒地」を余り厳密に解する勿れ、女も一緒に行ける様に。僕のフラウも保養を本当に必要としている様に思える、僕はこの冬には満足な状態だったとは全く言えない。彼女は心から君によろしくと言っている。ジエーノヴァではもつと良くなってくれ給え、移転に幸あれ。常に君のものなる

F・O

(一) 一八七二年創刊のベルリンの雑誌。

一六九、ニーチェより

「一八八三年二月三日受領、ラパロから」

親友よ、その言葉の調子と意向とに感謝し切れない君の手紙と同時に——ジエーノヴァから、その僕の以前の部

屋が二月一日には空かないという報せがきた。今までそこに住んでいる人が決心を変えたのだそうだと。ところでマルヴィーダ・マイゼンブークがもう数週間前からローマへこいと言ってきている。彼女は一つの部屋を見付けたのであり、さらに、毎日何時間か僕のために書くことを引き受けてくれる人をもた(即ち隣家に住んでいるホルナー嬢)。ローマは僕の好みの場所ではないが今の僕はそれ以上のものを選ぶことが出来ない。僕は二月半ばに到着すると書き送ったところだ。——と、ここでお願いしたいのだが、早急に僕の従来宛先へ金を送って欲しい(四〇〇フラン、出来ればイタリア紙幣で)、そして僕が君のところに置いてきた本「クセルフェルス著、イタリアの六〇日」もだ(帯封で)。

今は雨天続きだ、しかしその前には完全に澄んだ日が続く、僕は十分に利用した。その前の僕はさまざまな感情の全くの深淵の中にいた(僕の手紙は実に不完全なものだった——)、しかし僕は殆ど「垂直に」この深みから僕の高みへと飛び上った。今はまた「やって行ける」だろう、——せめてそう期待しよう!

その間に、実のところほんの僅かな日数で、僕は僕の最良の書《ツァラトゥストラ第一部》を書いた、そしてさらに言うならば、僕が昨年はまだ勇氣を持っていなかった決定的な一歩を踏み出した。今回は僕の一〇個の力の凡てが必要だった——そしてそれ等は實際僕の役に立ってくれた。今はまだ数日は「一滴も残さず飲み干すこと」で忙しい。繊細な耳の問題であつて、これを聴き取り得るためには如何に孤独であつてもあり過ぎることではない。次に僕が必要としているのは僕が僕の文を筆記させる人だけだ、そしてそのために今やホルナー嬢が「天から降つて」きたわけだ。

この情況下で健康も再び前進している。しかし僕は、今日勘定したら、最近二ヶ月間に五〇グラムの抱水クロール(純粋ノ puro)を消費した——この薬なしでは僕はもはや全然眠れなかったのだ! かしながら僕は眠つてきた、今まで約二週間ぶつ続けにだ——おお、何という恵みだ! ——

ところで僕自身に關しての僕の「モラル」は、以前にもまして、「孤独」だ。

わが古い親友よ、僕は今回は君に嬉しいことを書くかと思つたのだが？ そうなっているだろうか？ そして君の奥さんにも、心から元気を祈る。

君の F・N

一七〇、オーヴェルベックより

バーゼル、八三年二月四日

親友よ、お望みの金を同封して送る、ただしこれが出されるのは今日が日曜のため少し遅れる。全部をイタリア紙幣で受け取ることは不可能だった、それで一枚フランス紙幣が入っている。僕たちの間で取り決められている書留での送付方式を用いるが、多額の場合には僕はいつも心配だ。お分りの如く三月末にはまた一〇〇〇フランが入る筈だからこれについて指示してくれ給え。——旅行案内書を君は同時に受け取るだろう。——昨日受け取った君の手紙は嬉しいことを実に多く含んでいる、特に、再び「やって行つて」おり、しかもこの上なく良い意味においてであることだ、今また一つの「最良の書」が出来上つたのだからね。それは何を狙っているのだろうか？ 夫が君に対してかくも好意的であることに感謝しよう。君は著述家として天には係わり合わない、しかし天は丁度良い時に君を求める。——この次にはどうか、君が抱水クロラルなしでも眠る様になっているという報せをくれ給え。ゲルスドルフのお母さんが今年の初めに亡くなったことを君はもう知っているだろうか？——フラウが心からよろしくとのこと、いつも君のものなる

F・オーヴェルベック

一七一、ニーチェより

〔一八八三年二月一日受領、ラペロから〕

親友よ、金は入手した、そしてまたもや僕は、何という不快な面倒をもう何年も前から君にかけていることをつくづくと思った。もう直ぐ終るかも知れない。

君にこれを隠そうとは思わない、僕の工合は悪いのだ。僕の周りは再び夜だ。稲妻の輝きだった様な気がする——ちょっとした間だけ僕は完全に僕の得意の境地に、そして僕の光の中にあったのだ。今はそれも終った。僕は間違いく没落すると思う、何かが起こらなければだ、何であるかは全く分らない。誰かが僕をヨーロッパから引きずり去ることかも知れない——僕は、僕の物理学的思考法によって、自分を今では、ヨーロッパがさらされている或る内陸の氣候の変調の犠牲と見なしている。僕は自分が一つ余分な感覚を、一つの新しい恐るべき苦悩源を持っていることに對して手の下しようがない！そう考えるだけでも心が軽くなる——そうすれば人間たちを僕の悲惨の原因として告訴する必要がなくなるからね。これが僕には可能であるのだけれど！そして余りにも多過ぎる位に行なっているのであるけれど！僕が手紙で君に暗示したことは凡て、副次的な事柄でしかないのだ——苦悩に満ちたぞっとする様な思ひ出の、その様な幾重もの重荷を僕は背負って行かなければならない！例えば、僕の母が僕を僕の父の墓にとっての恥辱だと言ったことは僕の記憶から一時も離れたことがない。

他の諸例については黙するでしょう——しかし一挺のピストルが今の僕には、比較的氣持の良い考えを生み出す源泉だ。——

僕の全生活が僕の眼前で碎けた。隠され続けたこの不気味な全生活、これは六年毎に一步を歩み、そしてこの一步以外のものを本当に全然何も欲していないのだ。他方、それ以外の一切の事柄、一切の僕の間關係は、僕の仮面との關係なのであり、僕は完全に隠れた生活を送るために絶えずそれ等の犠牲たらざるを得ないのだ。僕は残酷極まる偶然事に常にさらされ続けてきた——と言うよりはむしろ、一切の偶然事を残酷事にしてしまったのは僕なのだ。

君に報せた、一〇日間の作品であるあの書《一九六頁を参照せよ》が今の僕には僕の遺書の様に思われる。僕が僕の重荷全部を一たん投げ捨てるや否や現われ出る僕の本質の姿が実に鮮明に描かれている。これは一つの創作であって箴言の寄せ集めではない。

僕はローマが恐ろしくて決心することが出来ない。どんな拷問がそこで僕を待っているかを誰が知ろう！それで僕は自分で自分の文の清書に着手した。

この空と天候変化の下で僕はどうしたらいいのだろう！ああ、この不安！しかも僕は、比較的には海辺が依然「一番良い」ということを知っているのだ！

心から感謝しつつ、君と奥さんの幸いを願いつつ

F・N

一七二、ニーチェより

〔葉書、消印はラバロ、八三年二月一日〕

親友よ、クセルⅡフェルスの書は今晚（土曜）までは未着だ。帯封には重過ぎたのだろうか？それとも製本された書物だから帯封ではいけなかったのだろうか？とにかく僕は、それがまだバーゼルにあると思う。——済まない！——
——またもや君に新しい面倒をかけて！

F・N

一七三、ニーチェより

〔葉書、消印はラバロ、八三年二月一四日〕

今、完成原稿をシュマイツナーへ送るところだ。お分りの如く、ラテン語で言えば、アラユル運動ハソノ終末ニ際シテ一層急速ナリ *omnis motus in fine celerior*。

ローマには相変らず決心がついていない（僕に約束されている良い交際にも拘らずだ、つまりデーモンホフ伯爵夫人と優れたノルウェー人たち。）——僕は、自分が今年には誰とも会うことが出来ないかの様な気がする。——

信じられない様な天候。そして実際、我々ノ後デ大雨 *après nous déluge* ⁽¹⁾ なんてものじゃない！

君の友

(1) これは普通は「アトハ野トナレ山トナレ」という意味で用いられる言葉である。この場合は *nicht* によって打ち消されているから、今じやんじやん降っているのである。

一七四、ニーチェより

〔消印はラバロ、二月三日、一八八三年二月四日受領〕

親友よ、調子は全く悪い。僕の健康は今は三年前と同様だ。全部が駄目になっており、胃は遂に睡眠薬をも受けつけないところまで来た——その結果は不眠のひどく苦しい夜が続き、さらにそのために徹底的な神経過敏が生じている。——ああ、僕は恐ろしいほどに「自虐者」たるべき性質を備えているのだ。自明のことだが、外から見れば僕は極めて理性的な生活を送っている。しかし僕の空想及び精神におけるアラユルソノ種ノモノ *et hoc genus omne* は僕の理性より強いのだ。

ローマについて言えば、僕は昨日取り消しの手紙を出した。また僕は、妹がローマにくることになっており、ヴェネツィア経由で旅行しようとしていることを間接に聞いた。

土曜に僕はジェーノヴァへ移る。僕の今後の住所は次の如くだ（これを他言しないようお願いする。）

ジュエーノヴァ (イタリア) サリーダ・デレ・パテスチオーネ八番 (内部六号)

僕は今までやってきたやり方ですっかり引き籠もりながら僕の健康を求める積りだ。昨年の僕の失敗は、僕が孤独を放棄したことだった。僕は理想的な人物や先例とばかり一緒にいることによって実に感じやすくなっているの、現在の人々との交際では信じられぬほどに苦しみ、そして不満を覚える。結局僕はそのために頑固になり不正になる、要するに、僕の健康には悪い。

ワグナーは僕が知り合いになった人の中で断然一番完全な人だった、そしてこの意味で僕は六年来、大きな欠乏に悩んできた。しかし僕たち両者の間には、致命的侮辱の様なものがある。彼がもっと長く生きたとしたら恐ろしいことになったかも知れない。

ルーは僕が知り合った断然一番利発な人間だ。しかしあれやこれやがある。

僕の「ツアラトゥストラ」はもう印刷中だと思う。

コーズイマには、書ける様になった時に直ぐ手紙を書いた。ワグナーの死後⁽¹⁾。つまり、僕が最悪状態の数日をベツドで過ごした後だ。

いやだ、こんな生は、しかも僕は生の弁護者なのだ!!

季節が許す様になったら直ぐに山地へ、モンブランの南斜面へ行く積りだ。

何もかも役に立たない。僕が僕を救わねばならない、さもなければおしまいだ。――

君と奥さんの健康はどうだろうか？

君の友

F・N

(1) ワグナーは二月一三日に死去。

一七五、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八三年三月九日〕

今「クセルフェルスのイタリア」が手許に着いた。――

頭痛にひどく悩んでいる、連日だ。

雪が降っている、昨晚以来だ。今までにジェーノヴァでこんなに沢山雪が降ったことがあったろうか？僕がライブツィヒを発った時も同様だった。

ブンゲルト氏というドイツの作曲家が僕を訪ねてきた。僕を誰かがここで訪ねてきたのは初めてだ。――彼の音楽は君たちのところではどう考えられているかね？――僕は頭をしぼってベットにねていた、そして彼は僕を二、三時間本当に楽しませてくれた――彼は僕に、彼自身が作った歌劇、特に彼のナウズィーカーのことを物語った（彼はポルト・フィーノで暮らしていた）。彼は詩人だ。――

（今は稲妻と雷鳴だ）。

君の友

F・N

一七六、ニーチェより

〔ジェーノヴァ、一八八三年三月〕

親友よ、君の手紙は心から有難かった。僕が今は僅かしか書かなくても御勘弁を。僕は病氣なのだ、ジェーノヴァに足を踏み入れた殆どその瞬間からだ。熱、頭痛、寝汗、大きな疲労感。大抵ベットだ。食欲も味覚もない。この病氣はここではインフルエンザと呼ばれている。ブライティング博士（ジェーノヴァ随一の医師で僕に非常に好意を持っている）がキニーネを処方してくれた。これは勿論僕自身も既に自分に処方していたものだ。――四乃至六週間か

かるものだそうだ。僕が独りでいてローマにいないことは何と幸いなことか！

ところで空は引続き明るく澄んで見える、そして僕の内部も凡てちゃんと生きて穏やかになっている、僕は自分があんなにも悩んだということの中に、僕にとつての或る宿命の様なものを見て取っている。それと共に僕は、自分がまだ持っていた個人的な種類の三つか四つの幸福の願いを心の中から切り捨てた、そして前よりも一層自由になった。——僕の家族から離れたことが僕にとって本当に良かったということが分り始めている。噫、僕がこの問題においては（僕が生まれて以来——）どんなに色々の事柄を超克せねばならなかったかを君が知っていればなあ！僕は僕の母を好まない、そして僕の妹の声を聞くことは僕には不快だ。僕は彼女等と一緒にいるといつも病氣になった。「喧嘩する」ことは僕たちは殆どなかった、去年の夏でさえだ。僕は彼女等を避ける術を心得ているのだ。しかしそれは僕の健康に悪い。

もう一つの「解放」を君に暗示してだけおこう、僕はレーの主著「良心の歴史」が僕に捧げられることを謝絶した——そしてそれによって、禍に満ちた幾多の混同を生じさせた一つの交際を終結させた。——

僕の最近の著が印刷されているかどうかは疑わしい。僕はこれについてその後何にも聞きも見もしていない。まあ、時間はたっぷりあるさ！——

マルヴィーダが丁度手紙をくれた。ワグナー夫人からも「コーズイマは、私たち皆を含めての世間に対して彼同様に別れを告げたのだと申しております、友人たちにも決して二度と会わず、手紙ももはや決して読まず、要するに、彼の思い出と子供たちとのためにのみ尼僧の如くに生きるのだと申しております。」——

殆ど僕もそうしたい位だ、同じ動機からではないにしても。僕は「姿を消す」だろう——僕はこのことを既にエンゲルディンから君に予期させたことがあったと思う。しかしその前に僕はまだ多くの考慮と、そしてまた君との長い個人的な話し合いを要する。

僕の生は徐々に形成されて行くのであり、痙攣を伴っていないわけではない——しかしそれは形姿を獲得するに到るのだ！

では！これからまた横になろうと思う。何と疲れたことか！君と奥さんにはいつも感謝で一杯だ

F・N

ジェーノヴァ、サリータ・デレ・パテステイーネ八番（内部四号）

火曜？日

ドイセンのヴェダーンタ書は卓抜だ。序でながら僕はこの哲学にとつては殆ど悪しき原理だ。

(1) この手紙は、当時オーヴェルベックが受け取った手紙と同様に、娘のダニエラ・フォン・ビュローが書いたものと思われる。

一七七、ニーチエより

〔ジェーノヴァから、一八八三年三月二四日受領〕

わが親友よ、君が長いこと手紙をくれなかった様な気がする。しかし僕の思い違いかも知れない、日日がそんなに長いのだ、一日をどう暮らしたらよいのか僕にはもう全く分らない、僕には一切の「関心」が欠けているのだ。心の奥底には不動の黒い憂鬱。その上に疲労感。大抵はベックだ、実際健康には一番賢明なことだ。本当に痩せてしまっていたので、不思議がられた。今は良い食堂 *Frattoria* が見付かっており、きつとまた肥る積りだ。しかし一番まずいことは、僕が半年だけでも何のために生きるべきか全然もう分らず、一切が退屈で苦痛で味気ない *degoutant* ことだ。僕の欠乏と悩みは余りにも多過ぎる、そして僕は、自分の精神的な過去全体の不完全さ、失策、そして全くの不連続性について、想像を絶する一見解を持っている。もう何もかも取り返しが付かないのだ、僕はもう何にも良い仕事をしないだろう。何のためにこの上何かをするのか——

僕の最近の愚行を思い出す、「ツァラトゥストラ」のことさ（はつきり読める字になっているだろうか？僕は豚の如くに書いてる）。これは二日ごとに僕の心に浮かんでは、忘れられて行く。これが何らかの価値を持っているのかどうかを僕は知りたい——僕自身はこの冬は判断力がないので、最も大ざっぱな意味においてさえ価値と無価値を間違え兼ねないのだ。ところでこれについて僕は何にも聞きも見もししていない、極力急ぐことが僕の印刷条件だったのに。印刷全体を電報で取り消すのが毎日妨げられてきたのは、僕が全体的に疲れていたからに過ぎない。僕は四週間以上も校正刷を待っている、僕をこんな風に扱うのは無礼だ。しかし僕に対してまだ丁寧な者が一体いるだろうか？それで僕は我慢する。——

冬が今年は一、二ヶ月ぐずづいている。そうでなければ、早速ちよつと山地へ出掛けて高処の空気を試してみることが考えられるのに。ジェーノヴァは僕に適した場所ではない、その様にブライティンダ博士は言っている。

僕はまだ一歩も散歩をせずにいる。夜は汗をかく。日目の頭痛は和らいできたが相変わらず定期的だ。

最近リーパーマイスター夫妻をホテル・ド・ジェーヌに訪ねた。彼等は今サンタ・マルゲリータにいる。

君も奥さんも好調であればいいと思う、君たちの生は実際失敗でなかった、僕はそれと思うと嬉しい。

君の友

F・N

一七八、オーヴェルベックより

バーゼル、復活祭の日曜日、一八八三年〔三月五日〕

親友よ、君に長く思われた期間は実際長かったのであって、僕は弁解不可能であり、君の思い違いではなかったのだ。僕のこの前の手紙は確かに数週間前に書かれたのであって、疾つくからこのことが僕自身の心にかかっていた、

しかも僕は休暇の第一週さえそれに対してどうすることも出来ずに過ごしてしまった。この休暇が僕にもたらした閑暇はまるでお話にならないのだ。溜っていた手紙やあれこれの些事が、直ぐさま僕に襲いかかった。この数日中にどうしても仕上げねばならない二、三の書評が今なお僕にのしかかっている、その上に、小さなものだけれど新しく始めることになっている講義の準備もある、これは主として僕自身がもっと知識を深めるために講ずるのだ（新約聖書原典の歴史）。こうなると、返事を書くこうとする苦しい位の衝動も時には衰える、最近特に君の手紙とそこに述べられているひどい悩みがその様な衝動を起こさせるのだが。僕が君にこれだけは言えるのは、君の友人たちにとっても、君がその様な悪い事情の一切に打ち勝つてくれることが重要事なのだということだ、普通の意味で君に愛着している者凡てにとっても、さらに特別な意味で君を「生の弁護者」と見なしている者にとってもだ。目下君の上には、君の過去と君の未来とが実に暗くのしかかっている、両者が君の健康に有害な作用を及ぼしていることも確かであり、そんな工合にして堪え続けられるものではない。過去、君の精神的過去の場合に君は失敗と不運のみを考え、乗り越えることが君にいつも可能だった事柄については考えない。君に眼をそいできた他の人たちだって大抵それを見逃してはいないのであって、それは決して君の友人たちだけではないのだ。君が断然うまくやった事柄を考える場合には、僕には、バーゼルでの君の働き、特に教師としての働きが思い出される、僕がその目撃者だったからであるが、僕にそれが直ぐ君の未来を思い描かせてくれるからでもある。君は当時全く別種の事柄で一杯になっていた自分の職務に向けた力は半分か四分の一か、とも角も一部でしかなかったのに、遙かに多くであったかの如き成果を挙げた。どうして君は、自分がもう何にも良い仕事をしないであろう、もう何もかも取り返しが付かないのだなどと考えるようにするのか？そんなことは英国的、格言的、従って古代的な知恵に矛盾するし、君自身のために作られた君の哲学の新しい知恵には全くふさわしくない。君の哲学は、君の生活及びその確固たる基礎付けにとつての幾多の障害を君にはっきり示してはいるけれど、それ等を過大視したりそれ等に降参したりすることまでも許してはいない、し

かるに君は、何のためにこの上何かをするのか？と問うている。僕が思うに、君のこの様な疑問が出てくるのは、少なくとも部分的には、君の未来の暗さ、つまり異常な不明瞭さのためなのだ。君は最近僕に、「姿を消し」たいと書いた。その際に君の想像には、全く確かな、疑いもなく非常に生き生きとしてさえいる一つの像が浮かんでいるのだ、そしてそれが君を次の確信で満たしているのだ（僕がいつもいつも君の手紙の中に、今度もまた、現われ出るのを見て実に嬉しく思う確信だ）、君の生は形姿を獲得するに到るのだとの。しかしその様な確信の表白が一友人を極度の不安で満たすこともあり得る。彼はあの像を持っていないのだ、そして君がその際に自身をワグナー夫人と一緒にしていることは彼を安心させるどころではない。彼女が実際、ともかくも彼女の生の終りにおいて、遂に完全に自身へそして全世界に対して自分のものと呼んだものへとその様に帰り行くことが、自然的人間のエゴイズムにも拘らずまだ何か真に恵みとなる要素を持ち得る状態にあるのだ、しかも、僕が思うに、人間性以外の何ものにも基づいていない或る尤もなモラルと完全に調和しているのだ。「君が姿を消すこと」は、それがワグナー夫人と何らかの共通性を持つていようと、君に何らの幸福をももたらさないことは確実だ。君が自分の将来の生活のためにもっと確かな諸目標に注目しない限り、君が目下大いに必要としている落着きの得られる可能性を僕は見出せない。それで僕は君に一つの考えを伝えたいと思う、君に関して僕は最近この考えをフラウと論じ合ったのだが、二人共に考慮に値しないものではないと思えたのだ。再び教師になることを君が考えたとすればどうだろう、僕の言うのは大学の教師ではなくて、高等学校の（ドイツ語か何かの）教師なのだ。現代のおとなの男どもとの接触が君に与えるあらゆる苦痛は僕には実に良く分るのだ、青年を経ての帰還なら比較にならないほど容易であるだろう、それよりむしろ君は青年のもとに完全に留まって君の方式で人々に働きかけて行くことさえも出来るのだ。次に、この様な教職は、君の最近の数年に無駄な時なんか全くなかったばかりか君がそれのためにひたすら成熟の度を増してきたと言える職務の一つなのだ、否、その点では他の如何なるものも比較にならない職務かも知れない。最後に、この種の意図に関して

は外的にも——ぞっとする様な言い方だけれど今の時代では分り易い表現を許し給え、僕は簡単に分り易く言おうと
しているだけなのだ——手づるが君に欠けてはいないと思う。何故なら僕の確信によれば、——序でながら僕はこ
の場合、そしてこのこと全体について、この上なく厳密な意味で心の底を打ち割って話しているのだ——君のその意図
はここで受け入れられるだろうから。これ等の暗示だけで止めておこう、この考えを君がよしと思ひさえすれば君は
万事を、僕が望み得る限りの見事さで、自分で実行するだろう。今の僕の最大の慰めは、君が医者の監視下にある
ことが分っていること、それで必要な処置や実際に有効な手段がゆるがせにされることはないものと期待されること
だ。冬を味わわされる様になったのはここでも三月に入ってからであり、つい一昨日だって大荒れだった。早く気候
が変ってくれるといいね、君が好都合な移転を考えることが出来るために。ブンゲルトについては僕たちは全く何も
言えない、ただ僕にはフリッツの音楽新聞の最近号の批評欄に彼の名前があつた様なおぼろな記憶だけがある。ケー
ゼリッツについて君に何か分っているかい？最近また僕は彼がここを去つて以来初めての手紙を書いたのだが、彼か
ら何の音沙汰もなくなつてからそろそろ二ヶ月になる。——君の「ツァラトゥストラ」についての報せは実に癪に障
る、そして僕が切に望みたいのは、君が待ち切れずに決裂したりしないこと、或いは少なくとも、事柄の進行のため
の今後の考えなしに決裂はしないことだ、この際僕たちはどうしたら有効な方策が得られるかを考えねばなるまい。
この詩作品の成立について君が書いてくれたことを読んで僕の心はその価値に対する信頼で一杯になっている、そ
して著述家としての君の回復がまさにこの種の作品によつて得られるだろうという希望を僕は最近抱き続けてきたの
だ。箴言が君にとって余りにも不首尾に終つたことは、幾つもの根拠から説明出来ると思う。シュマイツナーへは僕
から催促の手紙を書くか問い合わせをしてみようか？——今週君の金を受け取る、今回は一〇〇〇フランだ。そのうち
幾ら君に送つたら良いだろう、且つどんな風に？書留で君の住所へ送ることを今は考えているが、それだと紙幣ばか
りになる——フラウが心からよるしくとのこと、心配と友情をもつていつも君のことを考えている

君の

F・オーヴェルベック

一七九、ニーチェより

〔ジェーノヴァ、一八八三年四月初め〕

わが親友オーヴェルベックよ、君の良き手紙に対して僕の為し得る返事はこれのみだ、つまり、前進している。生命は今回はどうやら無事だった、今や健康の方も何とか持ち直したい。——いつも僕の体験と悩みとはこんな工合だった、つまり、僕がそれ等に堪え抜くとすれば、それ等は僕にとって利益になるのだ。僕は今では去年よりもずっとずっと明晰で決然としている、そして非常な火傷をした子供である僕は火に対する非常に明晰で決然たる怖じ気を持っている、これはつまり僕の場合には、人怖じだ。四、五人の人と知り合つたこの最近の数ヶ月（ジェーノヴァにおける）でさえ、僕の経験が繰返され、そして実証された。百回も僕はこうつぶやいた、最近三年間における根本的治療はあらゆる交際を控えることだったのだ、と。今はジェーノヴァは僕にとって「面白くない駄目なものになつて」いる。僕は絶対的な匿名 incognito を欲するだけの十分な誇りを持っている、見すばらしい境遇の中でもだ。しかし半分尊敬され半分我慢され半分混同されると地獄にいる様に感ずるのだ——それほどには僕は「十分な誇り」を持たない。——この前の手紙における君の提案は僕に最近なされた諸提案の中で断然最も受諾可能なものだ（ヤーコプ・ゾルクハルトは「世界史を専門的ニ ex professo 講ずること」を実に強く僕にすすめた——彼の生の黄昏を暗示しながら）。しかし差し当つてはツァラトゥストラの出るのを待つとしよう、これが出た後に僕をなおも青年の教師にしようとする当局が世の中にはなさそうな気がするのだ。ところで——何がこの僕のツァラトゥストラを邪魔したのか？五〇万部の讚美歌集なのだ、しかし今はトイブオーのところで僕の番がきている（だから僕は今月二五日ま

でここに留まり続けるだろう。——比較的には僕はバーゼルに、そしてバーゼル人たちに非常に良く合っている（最愛の友よ、君以上にだ！）。ここでもバーゼル人のプライティング博士が僕には断然一番ためになる交際相手だ（僕は昨日彼と一緒に彼が院長をしている病院で食事をし、彼と一緒に患者たちを見舞った）。しかしバーゼルの気候が僕には全く堪えられない、半年後にはまた半死状態になる。僕には澄んだ空が必要なのだ——そうでないと僕は自分のぞっとする様な気質のために没落してしまう（どの年齢の時には悩みの過剰が僕においては法外だった）。

最後に加えるが、僕がこの冬をもって一つの新しい発展の中へ踏み入ったという可能性がある。ツァラトゥストラは、僕以外の現存人物の誰一人として作り得ないものだ。僕は今こそ初めて僕の最良の力を見出したのかも知れない。「哲学者」としてさえ僕は自分の最も本質的な思想（或いは「狂想」）をまだ述べていない——噫、僕はそんなに寡黙であり、そんなに隠れているのだ！しかし「詩人」としては益々だ！僕の文献学を僕は忘れてしまった、僕は二〇歳の時にもっと良いものを学ぶことが出来た筈なのに！噫、何と僕は無知であることか！——

夏は森と高地、秋はバルセロナ——これが最も新しい計画だ。秘密にしておいてくれ給え！
誠実な友情をもって

F・N

一八〇、オーヴェルベックより

バーゼル、八三年四月一五日

親友よ、学期の緊衣の中に再び入れられる前にもう一度便りする、この緊衣は僕が予告した新しい小講義が行なわれることになれば今回は本当にきついものとなる。木曜に講義を再開せねばならない、そしてそれまでに、今読み終えたばかりのリップスィウスの大著の書評をも仕上げねばならない。同書は聖書外典の使徒伝に関する六〇〇頁以上のものであり、非常に深遠かつ有益であって確かに大きな喜びを与えてはくれるが、この著者が外へ出る時に身につけ

るのを常としている堅い七枚のよろいを全部着ている。僕が君にこんなことを書くのは、「虚無」を少々楽しませるためだ、君はそれを目あてに「自分の事柄を据え」たのであるが、君の事柄の中には今や幸いにしてツァラトゥストラが入っている。これによって今や断然たる前進が行なわれているということは僕の心を本当に軽くしてくれる報せだった。実際、「それが出るのを待つとしよう」、それが君の孤独な生の諸条件を変えるかも知れない、若しそうでなければ、君が暗示している君の今後の諸計画についての僕の懸念を和らげてくれるものは何一つないことになる。君が最近数年間に「火傷」したのは交際のためとは劣らぬ位に孤独のためだ、こういう感じを抱いたから僕は僕のこの前の提案を敢てしたのだ、あの提案はマイナス面も色々あるけれどその実行によって、君が今切り抜けた様な冬を再び迎えないで済む様になるならば、それ等のマイナス面は補われるだろう。ところでツァラトゥストラは既に幾分か世に知られている。三月末にフックスがこう書いてきた、「シュマイツナーから聞くところによればニーチェは今、ツァラトゥストラはこう語るといふ一書を企てていて、これは最近の諸著とは『少々違った書き方』のものだそうである。また送り出るのかも知れません。たとえ嵐の如くであろうとも私は堪えます。けれど六歩ごとに立ち止まって、まるで何処かの墓地で私が墓掘り人でもないのに復活の場所ばかり見ている様なこと——これは長いうちには私の忍耐力を消耗させます」と。これを書いているのは君の箴言集の一読者であり、君の箴言集はこれに匹敵する読者多数多くは見出さなかったであろう様な読者なのだ、何としても君のツァラトゥストラをこの読者に送るべきだろう。僕はフックスについては三年以上も前から全然もう耳にしていなかった。僕は今知ったのだが、ブラームスの鎮魂曲についての或る発言が一八八〇年一月に音楽指揮者の地位を得る可能性とひどく衝突するに到ったので、平生は実によく動くベンが彼の手から当分すべり落ちたのだ。それが変化を来したのは、僕が数週前にまた例のダンツイヒの音楽会プログラムの一つを突然受け取り、この新たな生のしるし、特にダンツイヒでの土地の確保に成功したらしいことを嬉しく思っ直ぐに葉書で礼状を出した時以来だ。そのちょっと後にやってきたのが、僕はまた言わねばなら

ぬが、「例の」返事の一つだった、——今回は七枚、——それに接して僕は何よりも先ず、尊重している一人の人間に何年ぶりかで再会し、それと共に直ぐに、彼が同じ人物であり続け何物をも失わなかったのだということを見て取る場合に受けるあの晴れやかな印象を受けた。彼の場合には、いつもそうであった様に実に機知に富んでおり、そしてそもそも彼の振舞い方の全体が実に不変であるものだから、「性格」と呼ばれているものさえ遂にはそれほどつまらぬものでは決してない様に思われてくるのだ、幾つかの印象のためにそれはつまらぬものと考えられがちだったのだけれど。とどのつまりはこれ等の印象までも結構消えずに残っているのさ。しかし一切をひっくり返して言えば結局は実に喜ばしい存在であり、非常な才能を持ちながらも自身を楽にする様には出来ておらず、それでも実に立派に切り抜けている人物だ。ダンツィヒでの土地獲得についてのあの推測は

「終りの部分がない」

(1) 「虚無を目あてに自分の事柄を据える」という言葉は「万事に無関心である」という意味で用いられるのが普通である。

一八一、ニーチエより

〔一八八三年四月一九日受領、ジェーノヴァから〕

親しい親しい友よ、その後僕は君の提案をもう一度良く考え、ヴェネツィアの作曲家 Maestro にも相談した。天気は素晴らしく、僕の健康と勇氣はどんどん増大中だ、だから僕の熟考は若干の価値を持っている。しのぐのが困難な安心出来ない時期が僕には多くある、その様な時には自分の熟考と決心との価値をも疑う。しかし健康と天候とが晴れてくるや否や、僕はいつも自らこう認めるのだ、自分は極度に苦しい生活をしたがらも二つの目標に迫っているのであり、きびしい辛い生活もそのために甲斐があるのだ、と。僕はこのことをはつきりと意識している、つまり、今までいつも僕にとつて最悪の結果をもたらしたのは僕の主要事から外れることであつた、それが職業という形

態を取らうと、他人のための努力という形態を取ろうとだ（――後者の部類には、奇妙にも、僕のこの前の夏と秋とが属する）。そしてこの冬に僕を生につなぎとめたのは、自分の主要事へ突然立ち帰ったことに他ならない。ここに僕が自分に最も困難な要求をせねばならない僕の義務があるのであり、ここに僕の生の源泉もあるのだ。教師たること、噫、それは今の僕には十分になるだろうと思う（去年の夏は僕はまだ教師であつたし、それが僕に何とよく適しているかを感じていた）。しかしもっと重要なものが存在しているのであつて、これに比すれば、有益で効果の多い教師の職も生の軽減、休養としが考えられないのだ。そして僕が自分の主要課題を果した時に初めて僕は、君が僕に望んでいる様な生活への安らかな良心を見出すだろう。――

しかし若しがすると僕はその課題を果したのでは？

その後ツァラトゥストラが、ゆっくりと、一枚また一枚と現われてきた。実際、僕はこれを今になってやっと知るに到った！これが出来たあの十日間には僕はそのための余裕がなかったのだ。本当に僕は、親友よ、全紙七枚分のこの小著を作り得んがために生き、働き、悩んだのである様に思われる時が折々あるのだ！否、僕の生がこれによって後世の是認を得るかの様にさえ。そしてあらゆる冬の中で最も苦しかったこの冬をも僕はその後、違った眼で見ている。この書がそれであるあの放血を決心するには、あの様に大きな苦悩が先ず必要ではなかったのだろうか？君には分っている様に、この書の中には実に多くの血が含まれている。

お願いだが、一〇〇〇フランを（フランス紙幣で、ドワカ *500 francs* plain）早急に送って貰えるだろうか？僕の住所、サリタ・デレ・パテステイーネ八番（内部四号）へ書留で、しかし内容表示なしで。

それから敬慕するミュンヒエンのロートブレッツ夫人の住所もお願いする、僕は夫人から一月二日に実に親切な手紙を頂いたのにまだお礼を言っていないのだ。――

フックス博士は、君の手紙における如き好意的判定を一生に一度貰ったことを喜ぶことが出来よう。僕は彼につい

て少々多過ぎる位知っているのだ。――

心から君と奥さんに感謝しつつ

ジェーノヴァ、水曜。

君のニーチェ

〔欄外に〕君の豊かな詳細な手紙に対してまだ全然礼を述べていなかった、この手紙は君の暇の残りを奪ったものであるだけに益々僕はこれを尊重せねばならない。

君がその大学の世界から脱け出すことが出来ればなあ！特に、窮屈というよりも締め付けられている様なバーゼル人たちの重たい空気から！この海辺には、バーゼルの半分の値段で三倍も健康に生きられる小都市がたっぷり存在している。

（１）オーグエルベックの義母ロートプレッツ夫人は前年にツューリヒからミュンヘンへ移転していた。

一八二二、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八三年四月二九日〕

親友よ、手紙と送付物、本当に有難う。健康と共に僕の人間性（つまり「善良さ」――）も優勢になったことを君に分らせるために、僕が木曜に和解の目的でローマへ《妹と会うために》旅行する積りであること（――他の凡ての点で馬鹿な旅行だ！）と僕が今僕の母に手紙を書いたことを報せる。

昨日僕は僕自身が引用されているのを読んで少々奇妙な気がした、そんな言葉を述べたのを忘れていたので。つまり、「良くドイツ的であることはドイツ離れすることだ」――
君と奥さんの元気を心から祈る

(1) 「さまざまな意見と箴言」の三二三番参照。

F・N

一八三、ニーチェより

「バーゼルで八三年五月三十一日受領、ローマから」

わが親友よ、精神的肉体的落着きの回復の点ではローマを考えたのは良い考えだったし、今までのところ間違っていない。僕は到る処で実に好意的な信頼を見出したのであって、僕の妹においてのみではない——これは僕にとって非常に必要だったのだ、たとえそれが僕に何時か非常に必要になるものの象徴と前兆であるに過ぎないとしても。実のところ健康は、厳密な意味での健康は、今までローマによって増進させられたわけではない、その上に大都会は僕の欲求には反している。ローマが提供する一切のものに対して僕の心は丸で準備がない、というよりむしろ、僕は他の事柄への準備の荷物をもう余りにも多く背負い過ぎていて、こんなに多くの未知の新しいものに関わるだけの自由な気持をもう持っていないのだ。古代のエピクロスの頭及びブルトウスの頭が僕を考えさせた、同様にクロード・ロレンの三枚の風景画も。しかし結局僕は、兄弟で友人たるものに語りかける様に僕に語りかけてくる精神が認められるものをまだ何一つ見出さなかった——そして昨日は人々が聖なる階段を昇ってひざまずく姿をさえ見た！

ところで僕のツァラトゥストラが君の手に届いているのではなからうか、僕自身は校正が終ってからそれについてはもう全く何も報されていない。それは自らの道をひとりで行けばよいのだ！——

今後の数年の使い方について言えば、僕はそれについてもはや不確かではない。そのための一つの外的条件は既にしばしば手紙で暗示した様に「遁世」だ、このことだけは明らかだ、そして僕に好意を持つ者なら、このことを矢張り分ってくれるだろう。この決心は僕に、君が考えるであろうよりもずっと多くの苦勞をさせる、そして正しい土地

の選択は僕を殆ど絶望させる。

妹には今後のこれ等の歩みの本来の動機を十分良く知らせた積りだ、それでこの点について彼女が話したら信用してやってくれ給え。昨年の諸体験は彼女に為になった——その限りにおいて僕にもだ。マルヴィーダ・マイゼンブークは僕に対して母親の様な好意に満ちている、彼女は僕が自分自身に最も望むものを僕のために望み、その掴み方と掴み場所をも心得ている。(序でだが、彼女は僕とレンバハ(画家)が親しい友だちになればよいと思っている。)

僕の住所は、ローマ、バルベリーニ広場五六番、最上階。僕は六月に入ってもまだここにいるだろう。

君と君の御一家に——何故なら、敬慕するロートプレッツ夫人が君のところにおいでだと思うから——僕と僕の妹との心からの挨拶を送る。

感謝しつつ君の友

F・N

一八四、ニーチェより

〔葉書、消印はベラッジョ、⁽¹⁾八三年六月一日〕

わが古い親友よ、今回僕が自分について報せるために送るのは決してぞっとする様な手紙ではなく(君は僕の手紙のために僕に飽きてしまったろう!)、快活で僕と非常に良く——和解した僕の妹だ。彼女がああ腹立たしい時期に僕に示した誠実さの報いを彼女に与えてやってくれる様に君と奥さんとに切に願いつつ、また、八週間前にケムニツツ(「ツアラトゥストラ」)に関して送った手紙がロートプレッツ夫人の手に入っていることを望みつつ、君の友

N

(1) コモ湖畔の町。妹は既にミラーノで兄と別れて、ルガーノを経てバーゼルへ向っていた。ニーチェはこの後キャヴェンナを経てズイルスへ。

一八五、ニーチュより

〔八三年七月二日受領、バイルス・マリーアから〕

わが親友オーヴェルベックよ！偶然（か郵便局）のために君の手紙は七月四日にやっと僕の手に届いた——そしてそれ以後は僕の調子が良くなかった。それで僕の手紙が遅れることになった、僕の息子ツァラトゥストラと全く同様だ、これの方は僕の意向では既にこの復活祭に僕の友人たちにお目見えする筈だったのだ、ところが先ず「クリスト教の妨害」（五〇万部の讚美歌集、これについては書いたと思うが？）がやってきた、そして今はまた「反ユダヤ主義の妨害」が邪魔をしている。どうしてかと言うと、実際、こんな状態なのだ、つまり、シュマイツナー氏が最近、反ユダヤ主義の件での「非常に大事な」討議と旅行のために出版は遅れざるを得ない——ツァラトゥストラ全部は、贈呈本も含めて、まだライプツィヒにある、と伝えてきたのだ！——あつぱれだ！ところで誰が僕を、僕の思想の普及よりも反ユダヤ主義的煽動の方を重視している出版者から救ってくれるだろうか？こう言ったからとて何も特に高慢な言い方だとは思わない。——

僕はお茶と豆の小包の上に書かれている文字が奥さんのものであるのを認めて心から感謝した、僕は奥さんに面倒をかけたのだ！噫、しかも僕は奥さんに面倒をかけ続けなければならない！先ず、僕は直ぐにまたお茶が要るのだ（この水は石灰水だから、二倍の量を使うのであり、それでもおいしい飲み物にはならないのだ。その上に僕はこの品質のものが好きでない、もっと良質のお茶を一ポンド欲しいのだが）。第二に、しかし僕は直ぐ奥さん宛に直接書くつもり。

ここでは非常に寒さに悩んできた。僕がストーヴなしの三回の冬によって若干鍛えられていることは本当に幸いだ。しかし寒い部屋は非常に気分に影響する、ジェーノヴァでもここでもだ。世俗Ⅱ離脱、迅速Ⅱ通過、漂泊者Ⅱ同然といった感情が僕の奥深くにある——そして、本当を言うと、僕の外的生活の非常な不愉快さの結果だとばかりは

言えない。温かい調子が僕に殆どまだ出てこないのだ、そして他の人々の心を温めるこの上なく良いものでも僕にはどうでもよくなってしまったものが多い。僕の健康について一言すれば、僕は最も我慢強い人間の一人だ、そしてやり方を色々と変えながらバランスをとっている。しかし病気の、苦しい、少なくとも深く抑圧された日日が余りに多いことは異常なほどだ。僕は患者としての自分に対して、考え得る限りの用心、きびしさ、そして自己超克を貫いているのだけれどね。二つの点が僕には不治と思われる。その一つは、規則的な精神的作業が必ず、或る期間（約二週間）の後には、ひどい衰弱を招くことだ、その作業が烈し過ぎるからだ（時間的には決して烈し過ぎはしない。既に眼のために実にはつきりした限界が与えられているからね）。もう一つは、僕の感情が、快感にせよ不快感にせよ、実に猛烈な爆発をすることであって、恐らく血液循環の変化のためらしいが僕を完全に病気にしてしまうのには厳密な意味で一瞬で足りるのだ（約十二時間後に病気が確実となり、そして二、三日続く）。最後に、曇った空は必ず僕を深く引き下ろす。雲に近いこの高地では、その際には不可避免的に頭痛まで起こる。だから、二〇〇日の曇り日がある地方は、僕から二〇〇日を奪い去る——そしてその逆も言える。

その他の点ではエンガディーンは僕にとって好ましくて貴重だ、そして九月半ばまでその様であるだろう。君をいつか本当に身近に持てたらなあ、古い親友よ！

F・N

（1）ニーチェは六月末から七月上旬にかけての二週間でツアラトウストラ第二部を書き上げたのであり、その直後に、一月下旬の第一部の時のことを思い出しながらこの手紙を書いているのである。ガスト宛七月一三日の手紙参照。

一八六、ニーチェより

〔一八八三年夏、ズイルス・マリーアから〕

わが親友オーヴェルベックよ、君にもさらに二、三の正直な言葉を書きたい、奥さんに最近書いた様に。僕は一つの目的を持ってるのであって、そのために僕はもっと生きる必要があり、またそのために僕はどんなに苦しいことをも凌がねばならない。この目的がなければ僕はもっと気楽に考えるだろう——つまり、とっくにもう生きてはいないだろう。僕の状態を近くで見て理解した人なら誰でも僕に向って「もっと楽にし給え！死に給え！」と言うことが許されたであろうと思われるのはこの冬だけのことではない——以前にも既に、肉体的苦痛の恐るべき数年の間に、僕の状態は同様だったのだ。僕のジェーノヴァの数年さえも、あの目的のための自己超克の長い長い連鎖なのであり、僕の知っている誰かさんの趣味とは違うのだ。それでだ、親友よ、「僕の内なる暴君」、仮借なき暴君は、僕が今度も打ち勝つことを欲している（肉体的苦しみに関しては、長さ、烈しさ、多様さの点で、僕は自分を最も経験と試験に富んだ人間に算えることが出来る。精神的苦しみに関しては同様であらねばならぬのが僕の運命なのだろうか？）。そして僕の思考法と最後の哲学がこの様なものである以上、僕は絶対的勝利をさえ必要としている、つまり体験を黄金に、最高級の有用物に変えることをだ。——

差し当って僕は勿論依然として格闘の権化だ。それで僕は君の奥さんからの最近の激励に接した時は、まるで誰かが老ヲオコオンを、蛇どもに打ち勝って欲しいと激励しているかの様な印象を受けたのだ。

僕の家族と僕——はお互いに余りにも違っている。しかし僕がこの冬に必要と考えた方策、今後あそこから手紙を貰わないという方策は、もはや堅持することが出来ない（僕はそれほど堅くないのだ）。けれどもレー或いはサロメ嬢に反対して書かれる軽蔑的な言葉の一つ一つが僕の心臓から血を流させる。僕は敵意を持つ様には出来ていない様に思われる（ところが僕の妹はつい最近も僕にこう書いてきた、兄さんは上機嫌であって頂戴、これは「気持の良い悦ばしい戦い」なのだから、と）。

僕は、僕が知っている最も強力な外転させる手段を講じた、そして特に、自分の最高で最困難な生産力に訴えた。

(その間に「道徳家のための道徳」のスケッチが出来上った。)噫、友よ、僕は実践と自己支配の老いた老獪な道徳家なのだ、僕はこの冬に神経熱の自己処理をした時と同様に当地でも何かをゆるがせにすることはなかった。しかし外部からは僕は援助されない。それどころか、まるで一切ものが、僕を僕の深淵につなぎとめておくために結託しているかの様だ。——例えばジェーノヴァの海岸が殆ど経験したことのない様な恐るべき去年の冬の天候、さらにこの寒くて陰鬱な雨降りの夏。

ところで危険は大きい。僕は余りにも凝集的な性質であって、何が僕にぶつかってもそれは僕の中心へ向って動いて行く。去年の不幸が実に大きいものであるのは、僕を支配している目的や目標との関係においてのみなのだ。僕はこのような目的を設定する自分の権利について恐ろしいほど疑惑的になってしまったのだ、そして今もそうだ——自分の弱さの感情が僕を襲ったのだ、凡てが凡てが僕を勇気づけてくれねばならなかった瞬間に！

親友オーヴェルベックよ、絶対に外転させてくれるものを何か見付けることを考えてくれ給え！今は極端な過激極まる手段が必要だと思う——君は想像出来ないだろう、如何に昼も夜もこの狂気が僕の中で荒れ狂っているのかを。

僕は今年は、僕の、この上なく明るく輝いている実に快活な事柄を考え出して書いた、僕と僕の悲惨よりも何マイルも高い処にある事柄をだ。このことは実際、僕の知る最も驚くべき最も解明困難なことに属する。

僕が計算出来る限りでは、僕は生きることが来年も必要だ——僕がさらに十五ヶ月持ちこたえる様に援助してくれ給え。

シユルスで会うという考えを実現することが何とか君に可能ならば、ちょっと報せてくれ給え——この提案だけでも僕は君に非常に感謝している。

誠実をもって

君のニーチエ

火曜。

(1) ベルヌリ書第一卷三四一頁以下所載のオーヴェルベック夫人宛の第三の手紙(七月二九日)の後に書かれた手紙である。序でながら、この手紙の草稿から偽造されたと思われる原本欠の妹宛書簡が「母と妹へのニーチェ書簡集」(一九〇九年刊)の五三一頁以下に三六四番(一八八三年八月初めのもの)として載せられている。シュレヒタ編ニーチェ全集第三卷一四一七頁及びボーダツハ著「ニーチェとサロメ」七八頁以下参照。

一八七、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス・マリニア、一八八三年八月一八日、ブレンナー峠のシュタイナハで受領〕

親友よ、愉快だ！前以て僕の心からの感謝を受けてくれ給え！それでは君と同じ晩にシュルスに到着することにする。宿泊にはピッツ・チャンパッチを提案する、——君が挙げている宿は廃業したところでは言われている。僕たちが一緒に三、四日は過ごす様にしてくれ給えよ。僕にこの様な喜びが何時また与えられるものは天でなければ分るまい、否、天でさえ分るまい！僕は今日ひどい発作から起き上った。相変らず一人きりだ。しかし僕の「侍医」、ジェノヴァのブライティン博士が僕を訪ねてくれた——これは必要だった。

心から君と御一家皆さんとに愛着しつつ

奥さんの非常に親切なお便りに感謝している！

N

一八八、ニーチェより

〔タラスプ付近のシュルスで行なわれた我々の会見からニーチェが帰って行った後で直ぐズイルス・マリニアから。八三年八月二八日受領〕

(この手紙は君だけのためのものだ。)

親友よ、君との別れは僕を憂鬱のどん底へ投げ戻した、そして帰りの旅の間ずっと僕は黒ずんだ幾多の悪感情から脱けられなかった。その一つとして妹に対する本物の憎しみがあった、妹は一年の間、不適當な時の沈黙と不適當な時のおしゃべりとで僕の最良の自己克服の成果を駄目にしてきたのだ、それで僕は遂に、容赦のない一つの復讐感情の犠牲になっている。僕の内奥の思考法は復讐や処罰の一切を拒否してきたのにだ。——僕の中におけるこの葛藤が僕を一步一步と精神錯乱へ近づける〔欄外に。この観点を僕の妹の肝に強く銘じさせてくれないだろうか?〕、このことを僕は全く恐ろしいほどに感じている——そしてナウムブルクへの旅がこの危険をどの位減じてくれるかは分らない。逆に、身の毛のよだつ様な瞬間がくるかも知れない——そして長く養われてきたあの憎しみが言動に現われるかも知れない。その場合には僕が断然一番の犠牲者であるだろう。妹に手紙を書くことも今はもう得策ではない——極めて無邪気な形のもの以外は（僕は妹に先日小詩で一杯の手紙を送った）。僕が妹と和解したことがこの事件全体において最も不運な処置だったのかも知れない——今こそ僕は、妹がそれによってサロメ嬢に対する復讐の権利を得たと思つたのであることが分るのだ。——失敬!

ライプツィヒの計画の懸念すべき点に関して僕たちが意見一致した後だったから、ハインツェの手紙を受け取って本当にはっとした。この手紙でこの問題全体——僕としては絶望的措置——が終りを告げた。その手紙を同封する。同様にツァラトゥストラⅠについての最初の公の発言をも。奇妙にも後者は或る監獄の中で書かれたのだ。僕を喜ばせるのは、同書で何が問題になっているのかをこの最初の読者が直ちに予感していることが見て取れることだ、つまり、ずっと以前から約束されていた「アンティクリスト」⁽²⁾なのだということを。ヴォルテール以来、クリスト教に對するこの様な暗殺計画はなかった——そして実を言えばヴォルテールでさえ、クリスト教をこの様に攻撃し得るのだとは夢にも気付いていなかったのだ。——

ツァラトゥストラⅡに関して言えば、ケーゼリッツがこう書いてよこした、「ツァラトゥストラは非常な力で働きかけてきます。けれども、今からもうこれについて意見を述べようとするのは、厚かましいと思います。これは私を打ち倒しました、私はまだ地面に倒れています」と。――

君はお分りだ！

ところで僕が君と一緒だった間に、僕の古い学校友達クルークが僕を訪ねてきたのだ（「ケルンの王立鉄道事業所長」だ、彼の名刺によれば）。

ケーゼリッツの手紙にはエピクロスについての幾つかの言葉が含まれている（以前にセネカについての言葉が含まれていたことがあったのと同様）。この哲学の事物及び人間に関する深遠な認識に触れているものであって、これ等の言葉に匹敵し得るものを僕は知らない。彼は、教父たちやその他の著述家たちの書いたものにエピクロス関係の記録がないかを調べさせるために図書館通いをさせている「お抱えの文献学者たち」を持っていることをほめかしている。

君と君の心からの信頼とをあの様に近くに所有し得て、何と嬉しかったことか！そして何と良く僕たちは理解し合っており、また、理解し合ったことか！一層安定している君の理性が、動揺に陥っている僕の頭の支えであり続けてくれる様に！

心から

君の友ニーチェ

(1) ライプツィヒ大学で哲学講義をする計画。プフオルタ時代のニーチェの師であり、その後、短期間パーゼルでニーチェの同僚であったこともあるライプツィヒ大学哲学教授のマックス・ハインツェがニーチェに出した返事は、ベルヌリ書第一巻三六九頁以下に載せられている。

(2) 世の終り(即ちクリスト再臨)の前に出現するものとイエスによって予言された悪魔。マタイ伝二四章五節以下及びヨハネ第一書二章一八節以下参照。

一八九、ニーチェより

〔葉書、消印はスペツィア⁽¹⁾、八三年一〇月三日〕

わが愛する友よ、君たちのところで気持ちよく過ごさせて貰った日日⁽²⁾に対する僕の感謝を伝えたと共に、或る確定的なことを伝えたい、これは無類のことであろう、即ち海の近くが僕にとっては言い様もないほど有難いということ。これによって、北方計画一切の否認が重ねて確認され根拠づけられる。海辺で生きることだけが僕に許されており、僕に可能なのだ、頭脳及び眼の点でだ——しかし何処でかノジェーノヴァは不可能だ、スペツィア(ここに僕は三日いる)も殆ど不可能だ。手紙はジェーノヴァ局留でお願いする、僕は何処へ行けばよいのかもう分らない。ブライティング博士は全く多忙過ぎる。

君のF・N

(1) リヴィエーラ海岸、ジェーノヴァとリヴォルノとの中間にある都市。

(2) ナウムブルクから南方へ帰る途中のニーチェは一〇月四日にフランクフルトでバーゼルのオーヴェルベック夫妻に電報を打った直後に、ドレーズデンからバーゼルへ帰る途中の同夫妻と偶然出会った。ニーチェはバーゼルで三日間過ごして九日夕方に南方へ発った。ベルヌリ書第一卷三八三頁以下に載っているローデ宛八三年十一月一日のオーヴェルベック書簡参照。

一九〇、ニーチェより

〔葉書、消印はジェーノヴァ、八三年一〇月三日〕

古い親友よ、タイヒミュラーの書を読みながら僕は、僕がプラトンを知ることが如何に少ないかそしてツァラトゥストラがプラトンの論ジ方ヲシテイル *Radicaler* ことが如何に多いかという驚きで益々呆然となる。——健康は信

じられぬほど低下したが、それをまた持ち上げてやろうとする好意は存在する。何処にも僕に適した場所が見付からず、元のジエーノヴァの元の宿に戻った——ここで元の快活さも再び見付かるといいのだが。これなしには僕は新しいものを何も見付けることが出来ない。君と奥さんを本当に心から偲んでいる。僕たち三人は勇敢であることが必要だ！

F・N

一九一、ニーチェより

〔葉書、消印はジエーノヴァ、八三年一〇月二七日〕

親友よ、タイヒミュラーIIが到着した、そして素晴らしいコルナローの書もだ——僕の水車への水だ！もしかすると僕が自分の経験をまとめる時が来るかも知れない。僕は多くのものを観察したり試みたりしてきた、そしてその報酬をも得たいと思う——例の「長いそして快活な生活」をだ。ドイツに住まないこと、そして僕の家族と一緒にないことが、少食の拷問と同様に僕にとって重要であることは勿論だ。僕は非常に衰えている、海風は言い様のないほど気が持がいい。プライティンク博士が僕に処方してくれたのが、僕が最初に治療に使った燐酸カリだったことは、僕を得意にさせた。彼はこれの効果を大いに納得するに到ったのだ。だから僕は自分自身の薬剤の発明者であるわけだ。同様に僕は、昨冬における僕の賢明なチフス治療を誇らしく思っている。そして僕が四年前と同じエネルギーをまだ持っているとするれば、僕は全体的にもきつとまた僕の身体と僕の精神との主になるだろうよ、しかも同じやり方だ（僕が無意識に用いていた方法が今アメリカで流行しているという話をしてくれた人がある）。

心から感謝しつつ

F・N

一九二二、ニーチェより

〔ジェーノヴァ、一八八三年一月二日パーゼルで受領〕

わが古い親友よ、君に良い一年が与えられんことを！というよりもむしろ、僕はこう信じている、君はそれを、君がそれに値している通りに所有するであろう、と。何故なら結局のところ体験されるものは常に自分の体験のみであり、もっと正確には、自分自身のみなのだからね。僕は君と一緒になるたびに君の落着きと穏和な堅固さに心の底からの喜びを覚えた。そして僕は次第に、十年の年月も大したものではないと考える様な長い意志以上には何物をも尊重しない様になった、たとえそれが沈黙の十年であろうともだ。僕たちがパーゼルで一緒だった君の前の誕生日以来、僕は君に多くの不安を抱かせてきた、もしかするとあれこれの疑惑をも。それにも拘らず僕は、君が今では十二ヶ月以前よりも次のことを良く知っていてくれると思っている、つまり僕は自分の中に、船長のさまざまな愚行を結局また挽回して償ってくれることが確かである舵手を持っているのだ——今までは非常に寡黙であつた一つの長い意志をもだ。——

一月一六日に當つて君にツァラトゥストラの第二部を送る様に妹に言いつけてある——四部の中の第二部としてそれを読んでくれ給え、つまり、その中のあれこれのものが全体的意味のなかで初めて必然性を持つ様になるのだということを理解してくれ給え。さらに君は、僕のこのツァラトゥストラが本来的文学性の一切から如何に遠く離れているかを知ってくれるだろう。一つの巨大な綜合が問題なのであつて、これはまだ如何なる人間の頭にも心にも浮かんだことのないものだと思つてゐる。数瞬間僕が眼前に見た通りの姿でそれを明るみに出し得たならば、僕は祝祭を行なつてそして死ぬ積りだ。——

僕の調子は、これを報せねばならないのは残念だけれど、悲しむに足るものだ。発作に次ぐ発作、毎日が一つの病史であり、僕は時々こうつぶやく、「僕はもう自分をどうしたら良いのか分らない」と。僕の生活が何と哀れに、そ

して外的恵みを断たれたまま、何年もの間ころがってきたことを、僕は今にして初めて完全に理解している——心を軽くしてくれるそれ等の恵みが僕にやってくるに違いないというひそかな期待が僕から去ってしまった今にして初めて。人々の未来について僕と一緒に考えることの出来る一人の人間が僕に欠けているということが思い浮かぶや否や、僕はそれが一層腹立たしくなっていくのだ——実際、僕に属している仲間が久しく欠けていたために僕の心は全く病み傷ついている。僕を助けに来てくれるものは何一つない、僕を快活に元気にするものを考え出してくれる人は誰一人いない、中間に身を置いて、最近の数年が僕の上に積み重ねた侮蔑的印象の一切から僕を救い出してくれようとするものは全くない。僕の眼はいつもよりずっとひどくなっている、それだけに、孤独が僕の重荷になる時が多すぎる。その上にジェーノヴァはもう全然いけない、騒音がひど過ぎる、そして散歩場所が余りにも遠過ぎる。二度目は何もかも駄目なものだということが分った。回復のために僕は新しい初めての印象が必要だ。この人たちから僕は全く何も得られない。ブライトニングとは大体一週毎に五分間会う、彼は時間も頭も完全にふさがっている。結局僕には人間ほど必要なものはないのかも知れない(だから例えばローマ)。しかしもう一つの事実は、僕が海辺でしか堪えて行けないということだ。——

友情をもって僕を思ってくれ給え、君も奥さんも(奥さんの翻訳計画はどうなっているかね?)特に二人で良い音楽を一緒に奏でる時には!

心から君の友

ニーチェ

一九三、オーヴェルベックより

バーゼル、八三年二月一三日

親友よ、日曜に君の手紙を受けた時は、丁度君に遂にまた書くところだとしていたところだった。ところが君の手紙が僕の中にまたもや実に多くの考えと感情を取りとめもなく起こさせたものだから、差し当りペンが僕の手から落ちてしまつて今日もそれを取り上げる気になれないかも知れないところだ、若し僕がちゃんとした手紙を書くことを諦め、そして君と再び語りたという欲求を満足させる以上のことを手紙に求めるのを諦めるに到っていないとすればだ。何よりも先ず僕は君が誕生日を祝つてくれたことに心からの感謝を述べねばならない。君が君の現在の苦境の中で僕のことをこんなに友情をもつて考えてくれることは、その苦境の中の君にとって実に僅かなものでしかあり得ない僕を二重に感動させるのだ。この様な状態であることは、勿論僕の心をしばしば重くする、そして君の今度の手紙の後でも僕はどうしたら君の役に立つだろうかと悲しく途方に暮れながら自問している。ジェーノヴァで君の孤独感が全然軽くならないことは非常な幻滅だ。事情が別であつた場合にのみ繰返しが可能だったのであり、少なくとも繰返しの場合には良い成果が得られにくいものだということは、僕にも完全に分る。しかしちゃんとした根拠なしに滞在地を替えることはもつと良くないだろう。もしかすると君は恒常的忍耐によつてもう一度良き聖霊たちを強要してジェーノヴァの空気を良くさせるかも知れない、そして君がまた強い健康を得て君の軌道を進み続ける様になれば、君のツァラトゥストラの勝ち誇つた前進も君を支えてくれるであろうということが益々期待される。このツァラトゥストラの前進を僕は君に何よりも先ず望んでいる、ただし君は、友人が君のこの軌道を特に心配しながら眺めているのを悪く思つてはいけないよ。以前の諸著よりもこの著作の雰囲気が入らないからというわけでないことはこの場合勿論のことであつて、君が激しい空気転換のあらゆる危険にまたもや曝されているということが友人には分るからなのだ。ところで僕は君の第一のツァラトゥストラを二、三週前に再び独り静かに読み通した、そしてその際に僕は、人類の未来をそもそもの高みの尖端に据えることに對する僕の根本的疑念を払い得ず、僕よりもそれに向いた気分を持つている他の人たちの様には到底うまく行かなかつたけれど、そしてまた、全体が差し当つては読者を未決定

状態の中に置き去りにしているけれど、それでもその中の飛び切り素晴らしい多くの美しい箇所は僕を感動させたのであり、君がこれ以上のものを作ったことがないと考えていることを僕に理解させるに十分であった。そして僕は、健康がすっかり君を見捨ててしまわない限りは、君の中の舵手への信頼を断じて失ったことがないのだから、君のツァラトゥストラ全体が成功するか否かが非常に重大であるということをも僕は納得している。しかしその場合に注意して忘れないで貰いたいのは、君が既に成し遂げた事柄も君に対して色々な要求を持っているのであり、その事柄が効果を持つためには君がどの様に脱け出して行くかが問題なのだとということだ。

僕は君に最近——一週間以上になると思うが——ローマ宛のヤーコプ・ブルクハルトの手紙を送った——少なくとも彼の筆跡だということを僕は宛名の文字ではっきり認め得ると思った、——そしてその受領についての君の沈黙がその行方不明を意味していなければ幸いだ。ローマの郵便局はその手紙を或る祝祭期の後でこの郵便局へ送り返してきたらしい、そしてこの郵便局はそれを直ぐ僕に届けてきたのだ。バウムガルトナー夫人——彼女は数日前の午後に息子のアードルフとその奥さんと共に僕たちのところにいた——は君にくれぐれもよろしくと言っており、彼女が受けたツァラトゥストラの上にシュマイツナーによって書かれていた宛名に従ってズィルス・マリーアへ宛てた手紙が君に着いていればいいかと期待している。僕はバウムガルトナーを説いて司書になるのをすっかり思い止まらせた、彼が今学期は再び或る主講義を行なっているのでそのことは一層容易だった。僕自身は講義が非常に少なうて済むので、計画中の若干の歴史的主題の仕上げをやっている。フラウの翻訳が開始されて、序説の「偉人たちの効用」が終ったところだ、冒頭を昨日一緒に読んだ。これは非常に難しい、表題からして早速だ。「表現する人たち」よりも良いものが君に何か考えられるだろうか？ 一緒に演奏は今ほ余りやらない。君の出発以来四回か五回やった位で、しかも新しいものは何にも僕たちの曲目にはならなかった。フラウが心からよろしくとのこと、そして僕たち二

人は、君の道程が余り暗くならない様に本当に願っている。誠実な友情をもって

君の オーヴェルベック

(1) ヒュッセンの「代表的偉人論」(Representative Men)を訳しているのだから、これ(Darstellende Menschen)は誤訳である。
Representative Menschenとすべきであろう。

一九四、ニーチエより

〔八三年二月八日受領〕 ニース(フランス) セギユランス街三八番(三階)

わが親友オーヴェルベックよ、今まで同様、僕に対する忍耐だけは持ち続けてくれ給え、僕の工合の良い何時間か何分かに基づいて考えれば——この様な時は稀だ、これは本当なのだ——僕は最も羨まれて然るべき人間の一人だ、そして今は従来よりもだ。ところが内心には、絶望に近い多くのものがあり、そしてこれ等のもののために僕は、僕に對する君の忍耐を得ていなければならないのだ——これもまた本当だ。しかし工合の良い時には僕は、自分が何年もの間、あらゆる航海の中で最も孤独な航海をしてきたのは無駄ではなかったということを知っている、つまり僕は、まだ誰も全く知らなかった僕の「新しい国」を発見したのだ。ところで僕は勿論、相も変わらず一步一步、その国を征服しなければならぬ。——

僕が見出した凡ての良いものの中で僕が一番投げ捨てたくないものは、或いは失ってしまいたくないものは、「認識の悦び」だ、君は若しかすると僕がこれを失ってしまったのだと疑い始めているかも知れないが。ただし僕は、今や、僕の息子ツァラトゥストラと一緒に、僕が今まで言葉で述べ得たよりもずっと高級な悦びへ昇り行かねばならない。僕が「悦ばしき知識」の中で述べた幸福は、本質的には、全く偉大な使命に対して自分が遂に熟していると感じ始めていてその権利への疑いが消え始めている一人の人間の幸福なのだ。僕のためにどうかもう一度一九四頁とそ

の次の頁の詩を⁽¹⁾読んでくれ給え。序でながらこの書全体は、「時は来た！僕たちは前以て、歌と踊りでささやかなお祝いをしよう！」という意味が述べられている様な箇所一杯だ。――

昨年と一昨年との異常な不幸の本質は、厳密な意味では、僕が自分と全く同じ使命を持つ一人の人間を見出したと思つたということだつたのだ。早まつてこんなことを信じなければ僕は、孤独化の感じ（誤解、輕蔑、そしてそれ等と関連している一切のもの）に僕が悩んだほどには悩まなかつただろうし、僕が悩んでいるほどには悩みもしないだろう。何故なら僕は、独りで僕の探検の航海をやり遂げる準備が整つているのだし、当時もそうだつたのだから。しかし僕が独りではないのだという夢をたつた一度見たとたんに、危険は恐るべきものとなつた。今でも、自分自身を持ちこたえる術の分らない時がある。

もう一つの不幸は、前の冬の非常に陰鬱な天候だつた、今度の夏と全く同様だつた。僕は光によって動くのだ。――
光は、僕が絶対に欠いたり取り換えたりすることの出来ない殆ど唯一のものなのだ、つまり明るい空にみなぎる光のことだ。ジェーノヴァはこの点で全く良くなかつた。今にしてやつと僕は、丸一年間にジェーノヴァが、冬の六ヶ月間におけるニスよりもさして多くの澄んだ日を持つてはいないという統計表を見つけた、それで即刻僕はニスへ出発したのだ。

先ずスペイン語をものにしたら、さらにヴァレンツィア⁽²⁾へ行く、次の冬あたりに。君の友のように衣食住の点でつましい人間は、何処でも容易に且つ安価に暮らせる。――

僕の調子は今は良い方だ。――

君の手紙と僕への君の気持とに心から感謝している。――僕は君と奥さんに二度と最近の様な厄介をかけない様に気をつける積りだ。

(1) 第三書の最後の数節と第四書の表題の下の詩。

(2) イベリア半島東岸の都市。スペイン語ではバレンシア。

一九五、ニーチェより

〔八三年二月二十六日受領〕

ニース、聖フィリップ谷、マツォレーニ荘

古い親友よ、君の手紙が何と嬉しかったことか！——新年になっても僕を我慢してくれ給えよ、新年は真近に迫っている——僕はこの旧年にすっかり飽きてしまった、そして僕が今日嘆きの手紙を書きたくないのは、この年にそれを余りにも書き過ぎたからだ——特に君にだ、わが親友よ！

僕の健康は、何年か前にパーゼルでそうだったのと同様の状態だ——僕にはもう出口も入口も分らない。巨大な量の心の苦悩が僕の土台を限なく損傷した。——ニースは甚だしく気に入らない。しかし澄んだ空という主要な一点では確かに僕の期待以上だ。前の冬を、別のリヴィエーラ海岸の曇った湿っぽい空気の中で過ごしたことは、大きな不幸だった。

要求された受領証を同封するから、まだ埋められていない箇所に書き込んでくれる様お願いする。金は差し当り職工銀行に預けてくれ給え、僕は三月まで手持ちの分で済ませる試みをしようと思う、一〇月に貰った分でだ。——僕のために君が最近やってくれた財政処置には大いに感謝しなければならぬ。——

丁度良い時に僕に贈られたのかも知れない一人の新しい人物がある。パウル・ランツキという名前前で、僕に傾倒する余りに、出来るだけ早く自分と僕との運命を結び付けたがっている。独身で、孤独と簡素を愛し、三一歳、哲学的志向を持ち、懷疑家というよりは悲観主義者。手紙で僕に「尊敬おく能わざる巨匠よ！」と呼びかけてきた最初の

人だ（このことは僕の胸に実にさまざまな感情と思い出を呼び起こした）。

彼はヴァロンブローサーのホテル（フォレストーリア）の共同所有者だ——遂に僕の「哲学」はもう一度この古い良
い崇高な片隅に自分の「巢」を作るだろう。——来年の一部を僕は多分その、ホテルそのものから離れてぼつんとあ
るパラディスイーノで過ごすことになる。僕はそうする様にと招待されているのだ。——この邂逅は驚くべきだ、
僕は去年はまさにこのヴァロンブローサーを求めてあの様な苦勞をしたのだった——そして若し君が僕の底意の幾分か
を見抜いたとすれば、この偶然が如何に僕に快いものであるかをも君は今や感ずるだろう。さあこれからだ！——

病氣、病氣、病氣！一瞬毎に激烈な感情が電光の如くに入り込んできて一切の身体の機能の秩序をくつがえす（僕
の考えでは特に血液循環を変える）とすれば、どんなに理性的な生活法も何を達成し得ようか。

奥さんに伝えて欲しいのだが、僕はエマソンを心情における兄弟の様に感じている（しかし彼の精神は悪く形成さ
れている）。

僕たち三人に幸あれ！

F・N

(1) フィレンツェ東方の山地にある避暑地。以前に修道院があつた。

(前号の訂正)

一一四頁八行目。「ベルガモ人のよう」を「ベルガモ行きの時と同様」と訂正。

同頁の注(2)。ニーチェは七二年秋に南へ旅行してベルガモから逃げ帰ったことがある。

一八四頁終から二行目。「書物の保険の問題は、ギリシャの朔日に延期するでしょう」と訂正。「やめにしよう」ということ。